

はらい かわ たて あと
弘川館跡 (第2次調査)

—宗教法人瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書—

2007.7

岩手県宮古市教育委員会

はらい かわ たて あと

払川館跡 (第2次調査)

—宗教法人瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書—

2007.7

岩手県宮古市教育委員会

序 文

岩手県宮古市は、平成17年6月の合併により新市が施行され、遺跡は現在確認されているだけでも580を数えます。遺跡が数多くあるということは、宮古市が長い年月にわり恵まれた自然に囲まれているからと言えるでしょう。

本報告書は津軽石地区で調査された弘川館跡の成果をまとめたものです。私たちは常に遺跡の保存に努めていますが、今回、住宅建築工事に伴いやむを得ず失われる所を記録保存の形をとって調査したものです。

弘川館跡の発掘調査はこの度で2回目の調査となります。平成16年に行われた1次調査では竪穴住居跡や炭窯、墓跡が発掘されました。今回は竪穴状の遺構が調査され、弥生時代の遺物などが出土しました。今後、本書がより多く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成19年7月

宮古市教育委員会

教育長 中屋定基

例 言

1. 本書は宮古市津軽石地区に所在する弘川館跡の第2次調査についての発掘調査報告書である。
2. 本書は「Ⅰ概説編」と「Ⅱ本編」から成る。概説編では主として調査報告の要旨である。本編は通常の報告書である。
3. この調査は、宗教法人瑞雲寺住宅建築工事に伴う記録保存を目的とした緊急事前調査として実施されたものである。
4. 調査主体は宮古市教育委員会である。本書の執筆・編集は文化課の江口が担当し、文化課担当職員がこれを補佐した。
5. 調査座標は公共座標第X系を基準としたものである。座標値は $X = -47,000.00\text{m}$ 、 $Y = +94,000.000\text{m}$ を原点とした。また、図版中は調査用の局地的な座標であることを明示するためにRを冠した。レベル数値は標高値を表す。
6. 土層観察及び文中の色調表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著1990年度版）を使用した。
7. 図版中の記号、略号の表記は以下の通りである。
K…攪乱 S…石
8. 遺構番号は第1次調査のそれに続けている。
9. 遺物の観察は全て肉眼観察によるものである。
10. 本書に収録した調査記録及び出土資料は、宮古市教育委員会で保管している。

目 次

序文

例言

目次 図版目次 写真図版目次 表目次

I 概説編	1
II 本編	2
1 序章	2
(1) 調査に至る経過	2
(2) 本調査の経過	2
(3) 調査体制	3
2 立地と環境	4
(1) 宮古市の位置と環境	4
(2) 弘川館跡と周辺の遺跡	5
(3) 遺跡の位置と現況	8
3 調査内容	8
(1) 基本土層	8
(2) 検出された遺構と遺物	15
1 竪穴状遺構	
2 土坑	
3 遺構外出土遺物	
4 調査のまとめ	26
付編 弘川館跡第1次調査出土の金属製品4点について	27
参考文献	
写真図版	29
報告書抄録	44

図版目次・写真図版目次・表目次

I 概説編

- 1 津軽石川流域遠景
- 2 第1次調査で検出された竪穴住居跡と土坑
- 3 第2次調査区近景写真
- 4 検出された遺構
- 5 出土した弥生土器と石器

II 本編

第1図 弘川館跡位置図	4
第2図 遺跡周辺地形図	5
第3図 周辺の遺跡分布図	7
第4図 第1次、第2次調査区位置図	9
第5図 第2次調査区範囲図	9
第6図 第2次調査区全体図・土層断面図(1)	11
第7図 第2次調査区土層断面図(2)	13
第8図 1号、2号竪穴状遺構、14号土坑平面・断面図	17
第9図 3号竪穴状遺構平面・断面図	18
第10図 遺構内出土遺物	19
第11図 遺構外出土遺物(1)	21
第12図 遺構外出土遺物(2)	23
第13図 遺構外出土遺物(3)	24
第14図 遺構外出土遺物(4)	25

写真図版

第1次調査出土鉄製品	27
1 弘川館跡第2次調査区調査前近景(西→)	31
2 試掘トレンチ設定時近景(西→)	31
3 完掘時近景1(南東→)	32
4 完掘時近景2(北西→)	32
5 調査区内D-D'土層断面(南西→)	33
6 調査区内C-C'土層断面(南西→)	33
7 調査区内A-A'土層断面(西→)	34
8 調査区北部谷3層堆積状況(南西→)	34
9 調査区北部谷3層検出状況1(南西→)	35
10 調査区北部谷3層検出状況2(南東→)	35
11 調査区内D-D'西部東5層以下土層断面(南西→)	35
12 調査区内F-F'北部東5層以下土層断面(東→)	35
13 調査区遠景(南西→)	35
14 1~3号竪穴状遺構、14号土坑完掘状況(西→)	36
15 調査区遺構検出状況(西→)	36
16 2号竪穴状遺構検出状況(西→)	36
17 2号竪穴状遺構検出状況(南→)	36

18 1号竪穴状遺構完掘状況(南→)	36
19 3号竪穴状遺構調査状況(南東→)	37
20 3号竪穴状遺構検出状況(南東→)	37
21 3号竪穴状遺構土層断面(南西→)	37
22 3号竪穴状遺構完掘状況(南東→)	37
23 調査区北部調査状況(西→)	37
24 14号土坑完掘状況1(南→)	38
25 14号土坑完掘状況2(北西→)	38
26 14号土坑土層断面(南→)	38
27 調査区内A-A'中14号土坑土層断面(西→)	38
28 谷1c層土器出土状況(西→)	38
29 谷2層縄文土器出土状況(南→)	38
30 調査区北東部東8層中振火山灰検出状況(南→)	38
31 作業状況(西→)	38
32 遺構内出土遺物、遺構外出土遺物1	39
33 遺構外出土遺物2	40
34 遺構外出土遺物3	41
35 遺構外出土遺物4	42
36 2号竪穴状遺構出土石器、遺構外出土遺物5	43

表目次

1 出土石器観察表	22
2 出土銭貨観察表	22
3 第1次調査出土金属製品観察表	28

I 概説編

はじめに

はらいかわたてあと

弘川館跡は津軽石川下流にある遺跡の一つで、
県立宮古工業高校から南西へ約2km離れ、龍谷山瑞雲寺の裏手にあります。戦国時代、当時の有力者によりこの地に築かれた弘川館とその周辺が弘川館跡として知られています。遺跡は標高40～70mの丘陵地にあり、館からは宮古湾が一望できます。今回の調査は遺跡内では2回目の調査で、住宅の建築工事により失われる部分を記録しました。本報告書は記録をまとめ、出土した遺物を整理した発掘記録です。

平成16年には遺跡内で初めて発掘調査が行われました。この第1次発掘調査では平安時代と考えられる竪穴住居跡が発掘された他、約400年前頃の墓跡などが発掘されました。



1. 津軽石川流域遠景（宮古湾側から）



2. 第1次調査で検出された竪穴住居跡（左）と土坑（右）

検出された遺構と遺物

今回の第2次調査では4基の遺構が検出されました。遺構は調査区の北東部、斜面を利用して掘り込まれています。種類は竪穴住居跡に似ていますが炉跡が検出されない竪穴状遺構（3基）、楕円状に掘り込まれたと考えられる土坑（1基）です。遺構の中からは弥生時代の土器片が出土しました。土器は遺構が自然に埋没された途中に入り込んだものなので遺構との関係は直接ありませんが、遺構が見つかった層からは同じく弥生時代の土器、特に後期（今から約1,800年頃前）の時期のものが出土したことから弥生時代後期の遺構と考えられます。この他縄文土器、石器、古代の土器など多種多様な遺物が出土しました。



3. 第2次調査区近景写真



4. 検出された遺構



5. 出土した弥生土器と石器

(左)
弥生土器
(右)
石鏃（弓矢の矢先に
取り付けられた石の
矢尻りです。）

Ⅱ 本 編

1 序 章

(1) 調査に至る経過

弘川館跡第2次調査は宮古市津軽石地区弘川において実施された民間開発事業に伴う緊急の発掘調査である。宮古市教育委員会（以下、市教委）は平成17年7月、施工主である宗教法人瑞雲寺（以下、瑞雲寺）が瑞雲寺裏庭に住宅を建築する計画を知ることになり、双方は埋蔵文化財に関する協議をすることとなった。瑞雲寺は年内の工事開始を計画していたが、市教委は計画予定地が周知の遺跡内弘川館跡（宮古市遺跡コードLG53-2264）であることから極力遺跡の現状保存と遺跡に支障のない工法を検討されたい旨を回答し、協議の結果、計画範囲の縮小、工事の日程を変更することになった。協議後の8月、市教委は現地踏査を行い、文化課協議により次年度に試掘調査を実施することとなった。

平成18年5月末、工事予定地内（工事対象面積225㎡）に試掘トレンチ（トレンチ面積123㎡）を「キ」の字形に設定し試掘調査を開始した。調査前からすでに造成されていた状況であったが、土器片が出土する遺物包含層を確認した。また、遺構と思われる落ち込みの跡も確認された。試掘調査終了後、両者は現地で協議を行い、市教委は工事予定地内に遺構・遺物が残されているため、工事前に発掘調査を要する点を瑞雲寺に伝えた。瑞雲寺は予定地の変更等はできない旨を市教委へ返答、このため市教委は緊急に発掘調査を行うこととなったのである。

市教委には試掘調査前に瑞雲寺から平成18年4月24日付けで文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届出書が提出され、市教委は4月26日付けで岩手県教育委員会に進達している。これに対して、県教育委員会からは瑞雲寺に工事着手前に発掘調査をする旨を通知し、市教委は瑞雲寺にこれを伝達している。また、調査着手後の7月21日付けで市教委は文化財保護法第99条第1項の規定により当埋蔵文化財発掘調査の実施を県教育委員会へ報告している。

調査の実施にあたっては、試掘調査前の平成18年5月29日付けで「埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書」を市教委と瑞雲寺との間で取り交わし、調査委託、調査費の負担、埋蔵文化財の取り扱い等の協定を結んでいる。これに基づき、両者は調査費に関する「埋蔵文化財調査委託契約書」を締結し、宮古市の受託事業として調査の着手に至ったものである。

(2) 本調査の経過

発掘調査は7月5日に開始した。試掘調査により明らかになった遺物包含層の検出面までを調査区全域に広げ人力で粗掘りを行う。表土を覆う盛土を除去すると谷に厚く堆積した土を掘り下げると多くの時間を要した。試掘調査時の土層観察用ベルトを除去後、1層目の遺物包含層の掘り下げと遺構確認を行う。遺物は土師器、弥生土器片が多く出土し、遺構は東側尾根の裾で確認した。7月末、遺構の検出面となる基本土層東4層の広がりを見直し、試掘調査時で検出していた3号竪穴状遺構の精査を開始した。

3号竪穴状遺構精査後、重複していた1、2号竪穴状遺構と14号土坑の精査に移る。検出面での覆土の違いにより新旧関係が明らかになっていたため、切り合い関係から、すなわち1号竪穴状遺構、14号土坑、2号竪穴状遺構の順で精査した。遺物はほとんどが弥生土器片で、1号竪穴状遺構、14

号土坑は少量であったが、2号竪穴状遺構では比較的多く出土した。すべての遺構で縮尺20分の1の平面図、断面図を作成し、1号竪穴状遺構、14号土坑を8月上旬に、1号竪穴状遺構を8月の中旬に精査が終了した。遺構精査終了後、その他の遺構の見落としが無いか調査区全域に広げ再度遺構確認を行ったが、他に遺構は見当らず、弥生土器を中心とする遺物包含層の基本土層東5層も8月下旬には精査が終了した。

東5層掘り下げ後はさらに下を掘り下げ遺構、遺物の有無を確認した。調査区北中央部の谷底に堆積している基本土層谷2層からは縄文土器片が集中して出土し、さらに東8層で中礫火山灰と思われる黄色の塊を散在的に確認した。しかし、遺構の有無を精査するも遺構は検出されなかった。東8層除去後、谷3層である黄色に近い上記の火山灰もしくは地山土である真砂土を谷底に溜まった状況で検出した。検出状況の写真撮影、平面図、レベリング終了後谷3層を掘り下げる。中からは縄文土器片が3点出土した(第11図1～3)。掘り下げ後は調査区北部において遺物が出土しなくなった。

調査区中央部から南部にかけては9月から本格的な調査に入った。北東から南西へ広がる谷地形であるが、最近の攪乱により遺物包含層である基本土層東5層ばかりか東側で地山が壊滅的に削平されたことで平坦に造成されていた。また、上記の谷2、3層と東8層は確認されなかった。試掘調査時では遺物の出土量が極少であったため、本調査においてもトレンチ調査とした。中からは土師器、須恵器、弥生土器片が出土するも散発的で、遺構は検出されなかった。このため無遺物層で地山直上の谷M層を確認した時点で掘り下げを終了した。

9月中旬からは調査区内の土層観察用ベルトと調査区北部、東部の調査区壁でのセクション図、写真撮影、調査区全域の平面図、写真撮影を行う。9月21日には機材撤収を行い野外調査が終了した。

室内整理作業は平成19年2月から始めた。2月には2次原図の作成、図面修正を行う。3月からは作業員を置き写真整理、遺物の実測、拓本作業を行い、4月ではトレース、報告書作成にあたった。

(3) 調査体制

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	関沢 敏	宮古市教育委員会文化課長	(平成19年3月まで)
	元田秀一	"	(平成19年4月から)
事務担当	竹下将男	"	文化課文化財係長(19年4月から文化財担当長)
調査員	高橋憲太郎	"	文化課文化財係主査
	鎌田祐二	"	文化課文化財係主任文化財調査員
	加納由美	"	文化課文化財係主任文化財調査員
	安原 誠	"	文化課文化財係主任文化財調査員
	長谷川真	"	文化課文化財係文化財調査員
	阿部 豊	"	文化課文化財係埋蔵文化財発掘調査員
	江口邦泰	"	文化課文化財係埋蔵文化財発掘調査員(調査担当)

発掘調査作業員 大沢裕明 大下義文 坂本晃 佐々木栄一 鳥居義文 山根保行 山屋秋英
 資料整理作業員 小田由美子 鈴木恵美子 堀内良子

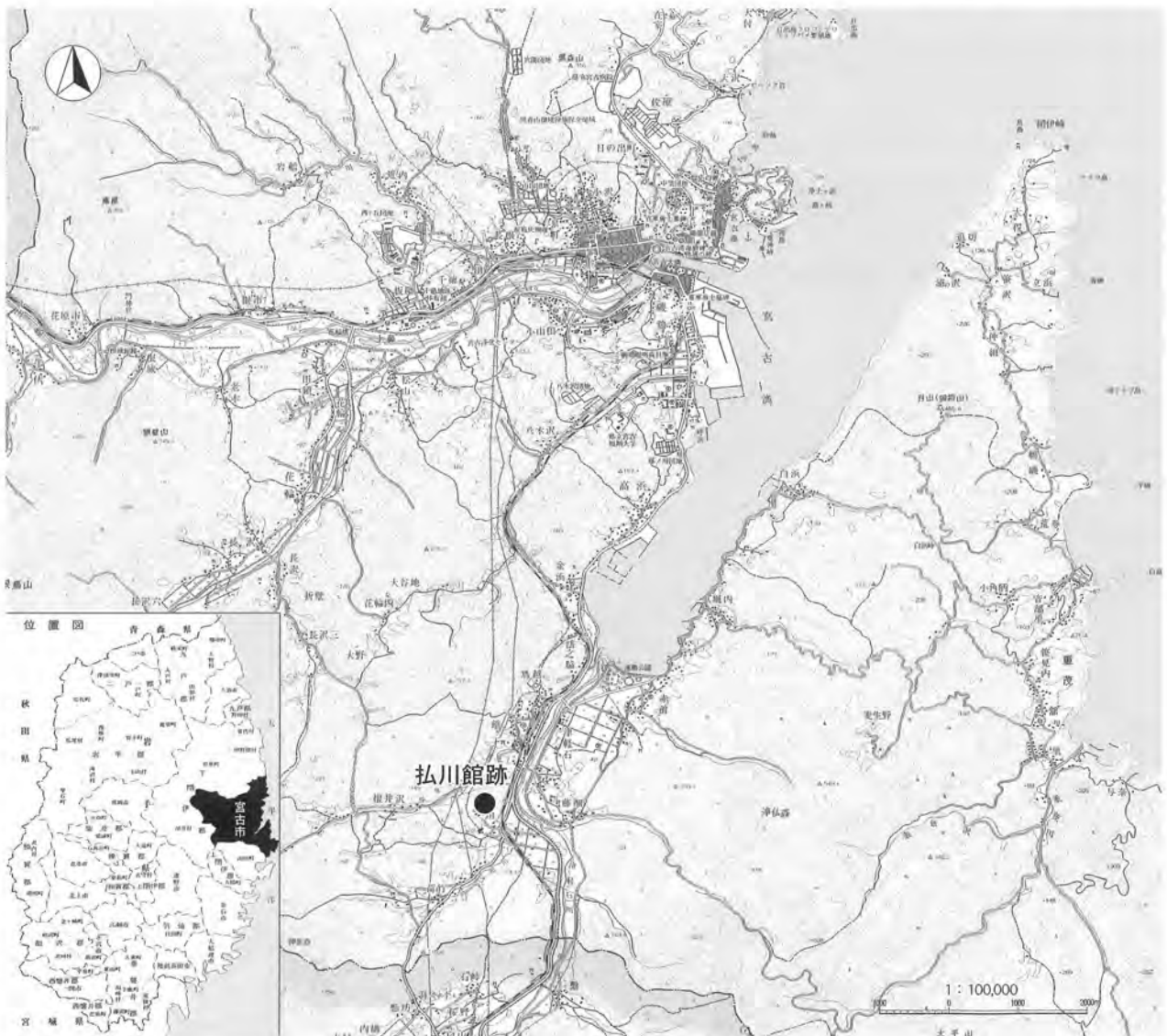
2 立地と環境

(1) 宮古市の位置と環境 (第1図、第2図)

岩手県宮古市は三陸沿岸地方の中部に位置し、盛岡市からは東約100kmの距離にある。平成17年には旧宮古市、旧田老町、旧新里村が合併し新市として市制が施行された。市境は、北が岩泉町、西は川井村、南は山田町と隣接し、東は太平洋に面した海岸線が続き、県により名勝に指定された浄土ヶ浜や県指定天然記念物の三王岩を代表とする砂浜や海食崖、断崖絶壁の隆起海岸が形成されている。市の南東部には重茂半島が位置し、最東端の鮭ヶ崎は本州最東端でもある。市の総面積は696.8km²、人口は6万人弱で、内陸に比べ温暖な気候である。

市内を流れる河川は宮古湾へ流れる閉伊川、津軽石川の他、田代川などがある。閉伊川は北上山地を源流とし、丘陵地を開析して流れる近内川、山口川、長沢川、刈屋川などの支流と合流して太平洋へ流れている。津軽石川は山田町豊間根を源流とし、根井沢、七田川と合流して宮古湾の最南部へ流れている。こうした河川流域の樹皮状に開析された丘陵地には数多くの遺跡が立地している。

市内の地形は主に山地と丘陵地で占められている。山地は川井村と隣接した市の西部で標高1,000m



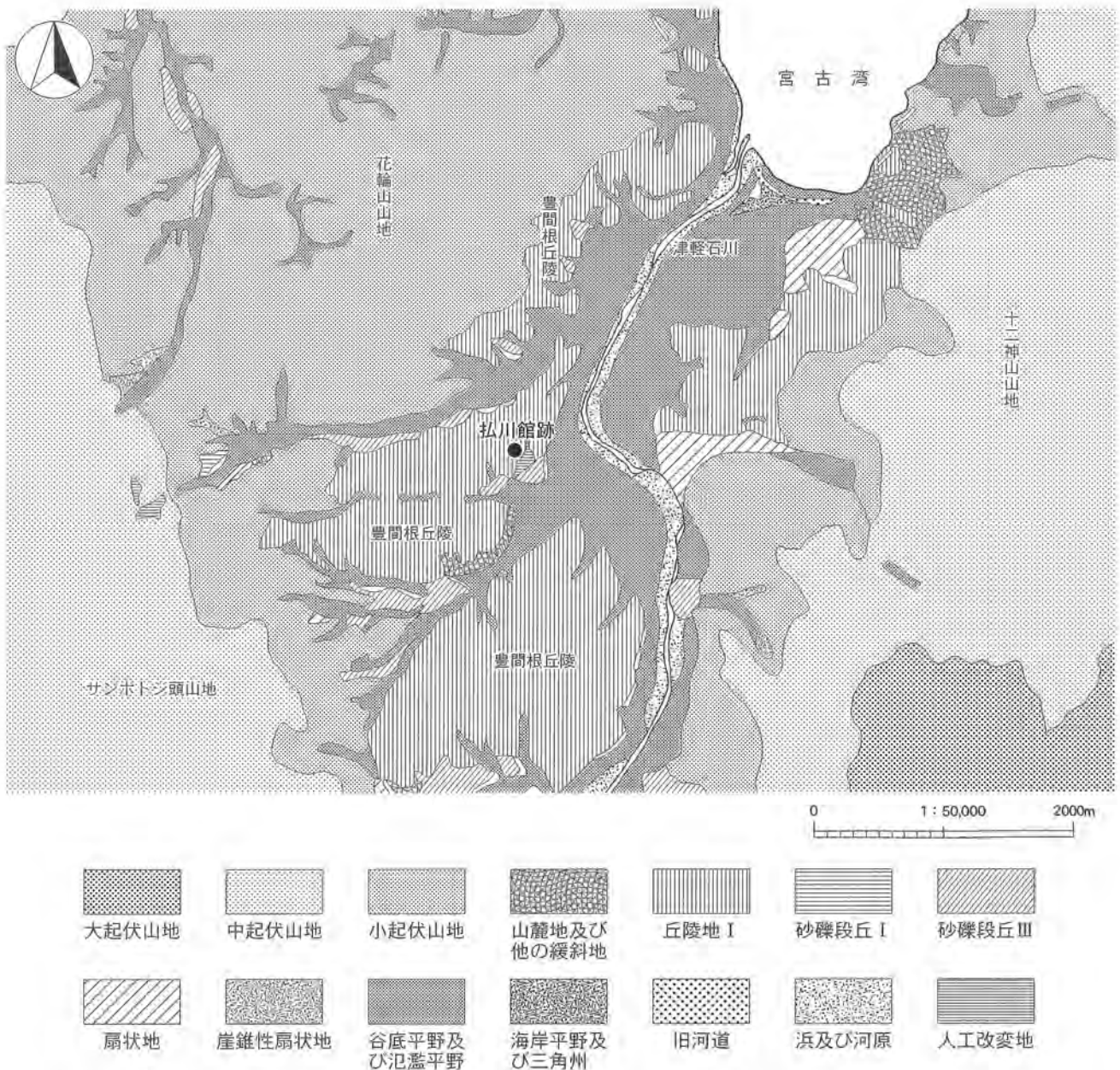
第1図 弘川館跡位置図 (1 : 100,000)

級の大起伏山地が広がっているものの、山地帯の多くは重茂半島にある月山（455m）や十二神山（731m）といった中起伏山地や黒森山（310m）を代表する小起伏山地からなる。また丘陵地には閉伊川流域の千徳丘陵、八木沢丘陵や津軽石川流域の豊間根丘陵の他、太平洋と面し小河川が流れて開析された小本丘陵がある。小本丘陵は隆起海岸により形成された丘陵で、段丘上には国の史跡である崎山貝塚を代表とする大中規模の遺跡が数多く所在している。

弘川館跡は津軽石川の左岸に位置した遺跡である。津軽石川と支流の根井沢、七田川に囲まれた豊間根丘陵上の遺跡で、標高約40～70mの山の尾根と谷で形成されている。

（2）弘川館跡と周辺の遺跡（第3図、第4図）

弘川館跡（第3図1）は16世紀前半に築城された弘川館とその周辺を指す。弘川館は大永二年（1522



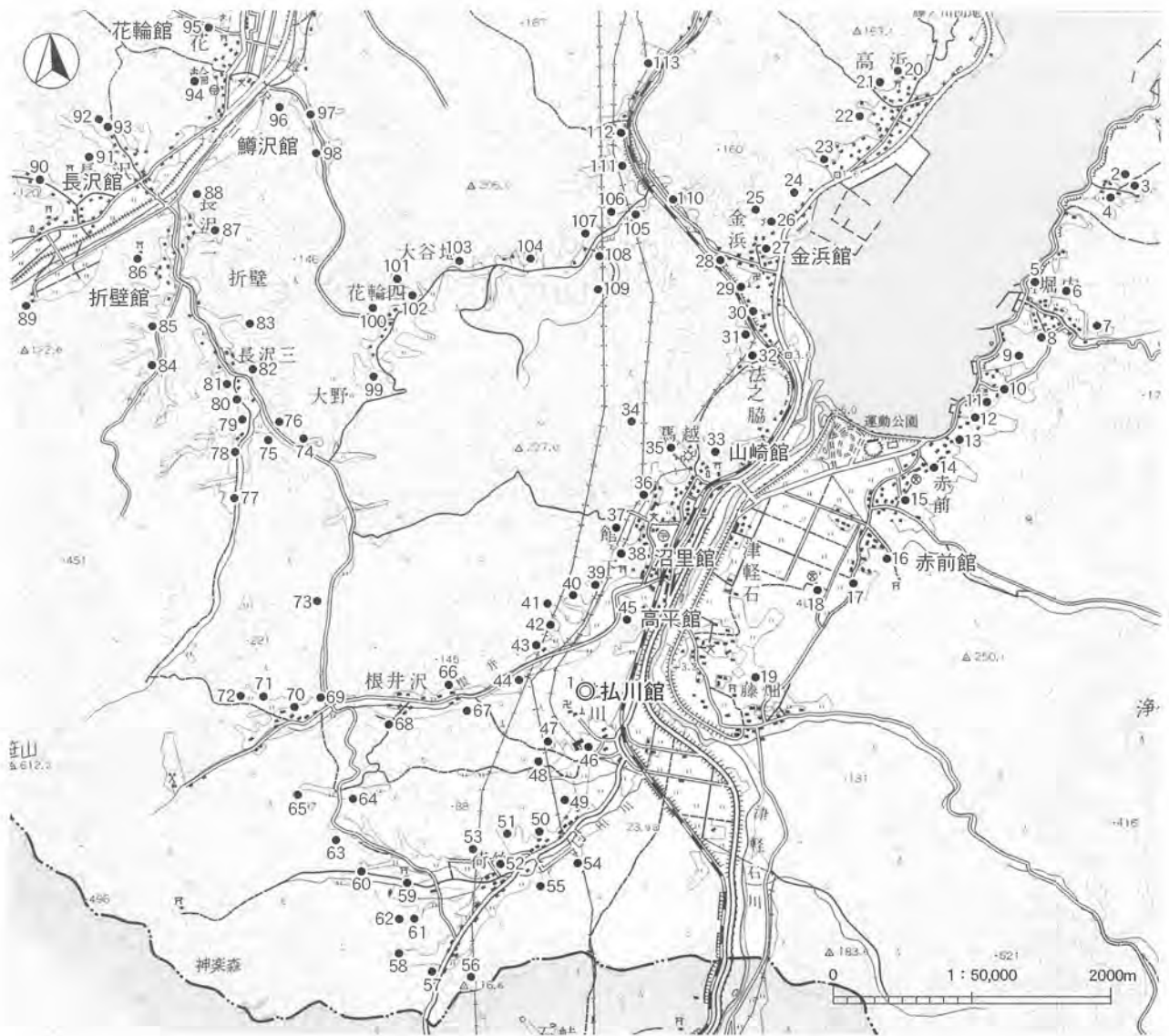
第2図 遺跡周辺地形図（1：50,000）

年)、土豪である千徳氏の別家一戸信濃（津軽石氏）が沼里館（38）から弘川へ移ったことで築城された館であると伝えられている。館は15世紀後半に千徳氏と津軽石氏の争いの時に落城したとされている。現在は主郭（標高約65m）、二の郭、三の郭と思われる平場が宮古湾の方向を向いて階段状に築かれていたことが確認でき、大手門跡、空堀跡、砦跡を見ることができる。

弘川館跡では平成16年に初めての発掘調査が行われている(以後、第1次調査と呼称する)。今回の調査区と隣接しているが尾根に隔てられている。第1次調査区では尾根上に古代の竪穴住居跡が1棟、時期不詳の炭窯が1基、中世後期の墓跡が1基、近世、江戸時代の墓跡が5基検出されている。竪穴住居跡は約半分が残存し、カマド周辺からは土師器、鉄製品が出土した。また、カマド内部からはアワビ類の殻片、キタムラサキウニの殻板、ニホンジカの中手骨・中節骨の一部が出土している。炭窯は尾根の下東側斜面の裾で検出され、平面が隅丸長方形を呈し、内部から多量の炭化クリ材が出土した。中世後期の墓跡（1号墓壙）では平面が楕円形に掘り込まれ、中から鉄製の刀子と中が大きく抜かれた銅製の輪銭（無文銭）が12枚出土している。江戸時代の墓跡では2～4号、6号墓壙で横臥屈葬もしくは座葬された人骨と寛永通宝などの銅銭が出土している。その中で3号墓壙では人骨鑑定により20歳代女性の人骨との鑑定結果が得られている。また、3、4、6号墓壙内からは棺に使われたと思われる鉄製の釘や金具がそれぞれ9点、48点、26点出土している。この他、遺構外遺物として弥生時代後期の甕、石鎌、土師器、須恵器、肥前系磁器、石器、鉄滓、羽口、銅銭などが出土している。特に谷からは鉄滓が多く出土し、第1次調査に伴う試掘調査で炭窯からわずか5mの所で炉壁が検出されていることから、鉄生産が行われていたことが指摘されている。調査により弘川館跡は館跡の他、古代の集落跡、中近世の墓地、鉄生産跡の性格を有する複合遺跡であることが分かった。

弘川館跡近辺の調査例では、弘川I遺跡（第3図46）、荷竹日向IV遺跡（52）などがある。弘川I遺跡は高齢者向け福祉施設の建設に伴い調査され、縄文時代の陥し穴状遺構、奈良時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡などが検出されている。荷竹日向IV遺跡は平成18年に調査され、縄文時代早期中葉の貝殻複縁土器が出土したことが報告されている。津軽石川支流の根井沢流域では上根井沢I遺跡（第3図69）、沼里遺跡（37）で発掘調査が行われている。上根井沢I遺跡では掘立柱建物跡が2棟、柱穴列などが検出され、柱穴や検出面から肥前系もしくは瀬戸美濃系の磁器が出土している。沼里遺跡からは縄文時代の竪穴状遺構、土坑、焼土遺構と古代の竪穴住居跡などが、さらに近世の竪穴状遺構、掘立柱建物跡、墓跡などが検出されている。墓跡からは座葬と思われる人骨が埋葬され、寛永通宝の他に煙管、刃鎌が副葬されていた。また、弘川館跡第1次調査と同様に棺に使われたであろう鉄製の釘や金具が出土している。この他、津軽石川左岸では藤畑遺跡（第3図19）で発掘調査が行われ、奈良時代の長さ8mを超える竪穴住居跡や鍛冶炉跡などが検出され、土師器、土製紡錘車、鉄滓、羽口が出土している。

さらに遺跡周辺をみると、宮古湾東岸では奈良時代の竪穴住居跡の他、炭化したイネが出土した土坑が検出された小堀内Ⅲ遺跡（第3図11）、遺物包含層が検出された赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡（12）、平安時代の竪穴住居跡が検出され鉄製の刀子や銚などが出土した赤前Ⅴ柳沢遺跡（13）、縄文時代中期、弥生時代後期、奈良時代の竪穴住居跡の他、平安時代の竪穴住居跡と製鉄遺構が検出された赤前Ⅳ八枚田遺跡（14）、縄文時代前期の大木1式土器を伴う竪穴住居跡の他、古代の竪穴住居跡、製鉄炉が検出した赤前Ⅲ遺跡（15）がある。また、宮古湾西岸では縄文時代中期から後期前葉までの集落跡が調査された高浜Ⅵ地神遺跡（26）、主郭、空堀が確認され、主郭である平場に16世紀代の美濃産天目茶碗が2個体出土した建物跡が検出された戦国時代の金浜館（27）がある。



1	弘川館	24	高浜V下地神	47	弘川II	70	上根井沢II	92	寺沢II
2	白浜太田浜III	25	金浜堤ヶ沢	48	弘川III	71	上根井沢III	93	寺沢I
3	白浜太田浜IV	26	高浜VI地神	49	荷竹日向I	72	上根井沢IV	94	程久保
4	白浜太田浜V	27	金浜館	50	荷竹日向II	73	長沢横街道IV	95	花輪館
5	堀内I	28	金浜I	51	荷竹日向III	74	長沢横街道III	96	鱒沢館
6	堀内II	29	金浜II	52	荷竹日向IV	75	長沢横街道II	97	鱒沢I
7	堀内III	30	金浜III	53	荷竹日向V	76	長沢横街道I	98	鱒沢II
8	堀内IV	31	金浜IV	54	荷竹日影I	77	上大野III	99	大谷地V
9	小堀内I	32	金浜V	55	荷竹日影II	78	上大野II	100	大谷地IV
10	小堀内II	33	山崎館	56	荷竹日影III	79	上大野I	101	大谷地III
11	小堀内III	34	馬越II	57	荷竹日影IV	80	中大野II	102	大谷地II
12	赤前VI釜屋ヶ沢	35	馬越I	58	荷竹日影V	81	中大野I	103	大谷地I
13	赤前V柳沢	36	津軽石大森	59	荷竹米山I	82	下大野II	104	下大谷地VI
14	赤前IV八枚田	37	沼里	60	荷竹米山II	83	下大野I	105	下大谷地I
15	赤前III	38	沼里館	61	荷竹米山III	84	中折壁II	106	下大谷地II
16	赤前館	39	根井沢穴田I	62	荷竹米山IV	85	中折壁I	107	下大谷地III
17	赤前I牛子沢	40	根井沢穴田II	63	荷竹米山V	86	折壁館	108	下大谷地IV
18	久保田	41	根井沢穴田III	64	荷竹米山VI	87	下折壁I	109	下大谷地V
19	藤畑	42	根井沢穴田IV	65	荷竹米山VII	88	下折壁II	110	賽の神
20	高浜I坂ノ下	43	根井沢穴田V	66	根井沢I	89	長沢向	111	八木沢III野来
21	高浜II今ヶ洞	44	根井沢日影I	67	根井沢日影II	90	長沢内の沢	112	八木沢駒込II
22	高浜III熊野	45	高平館	68	根井沢II	91	長沢館	113	八木沢駒込I
23	高浜IV横須賀	46	弘川I	69	上根井沢I				

第3図 周辺の遺跡分布図 (1:50,000)

(3) 遺跡の位置と現況 (第4図、第5図)

弘川館跡は宮古市役所から南南西へ約8.5km、県立宮古工業高校から南西へ約2kmのところであり、宗教法人龍谷山瑞雲寺の裏にある。遺跡は館に係る尾根とそれに連続する周辺の尾根と谷からなる。遺跡の範囲は南北約500m、東西約370mで北は高平館、南は弘川Ⅱ遺跡とほぼ隣接している。遺跡の現況は多くは山林であるが、館の一部は墓地として利用されている。

今回調査した第2次地点は宮古市大字津軽石字弘川35-2に所在する。第1次調査終了後の大規模な造成以後の調査であるため、調査区の西隣りは大きく改変され、当調査区においても既存の建物が南へ移築されたことで調査区の南部で旧地形が大きく変わっていた。調査区は東西の尾根から下りた裾と谷からなるが(第4図)、上述のように切り盛りで造成された2段の平場からなる空き地となっていた(第5図)。

3 調査内容

(1) 基本層序 (第6図、第7図)

調査区内における堆積土の土層観察は試掘調査から引き続き南北2箇所、東西1箇所のトレンチ壁の土層と、本調査時の北壁・東壁の土層を主とし、加えて南部において南北の土層関係を把握するために補助的に土層観察を行った。観察の結果、東斜面からの流入土、西斜面からの流入土、北すなわち谷からの流入土に大きく分かれることが分かった。しかし、調査区中央部から南部にかけては上部の削平により北部との対応関係は明示することができず、新旧関係は一部しか把握できなかった。

以下、基本土層の内容について記述する。

盛土層 調査区中央部から西部にかけて盛土されていた。真砂土を主体とした色の土で、東部の旧地形が改変されたときの切り土が盛られたものと考えられる。土師器、磁器、陶器が出土した。

I層(表土層) 2層に細別される。I a層は暗灰黄色壤質砂土を板状に含んでいる、I b層は暗灰黄色壤質砂土を少量、黒褐色土・カーボンを含んでいる。

II層以下は堆積土層数は43を数える。煩雑を避ける為、ここでは流入してきた方向を付記しそれぞれ1、2、…とする。色調、混入土、混入物、締まり、粘性については第7図に記載している。

東1層 黒褐色土を基本土とする。無遺物層である。

東2層 2層に細別され、2 b層はカーボンを混入している。ともに土師器、須恵器が出土している。

東3層 黒褐色土を基本土とする。土師器が出土するが、弥生土器が多く出土している。

東4層 調査区北東隅に確認されている。弥生土器が出土している。

東5層 縄文土器が少量出土している。検出された遺構はこの層を掘り込んでいる。

東6層 調査区東部端にのみ見られ、弥生土器、土師器、石鏃が出土している。

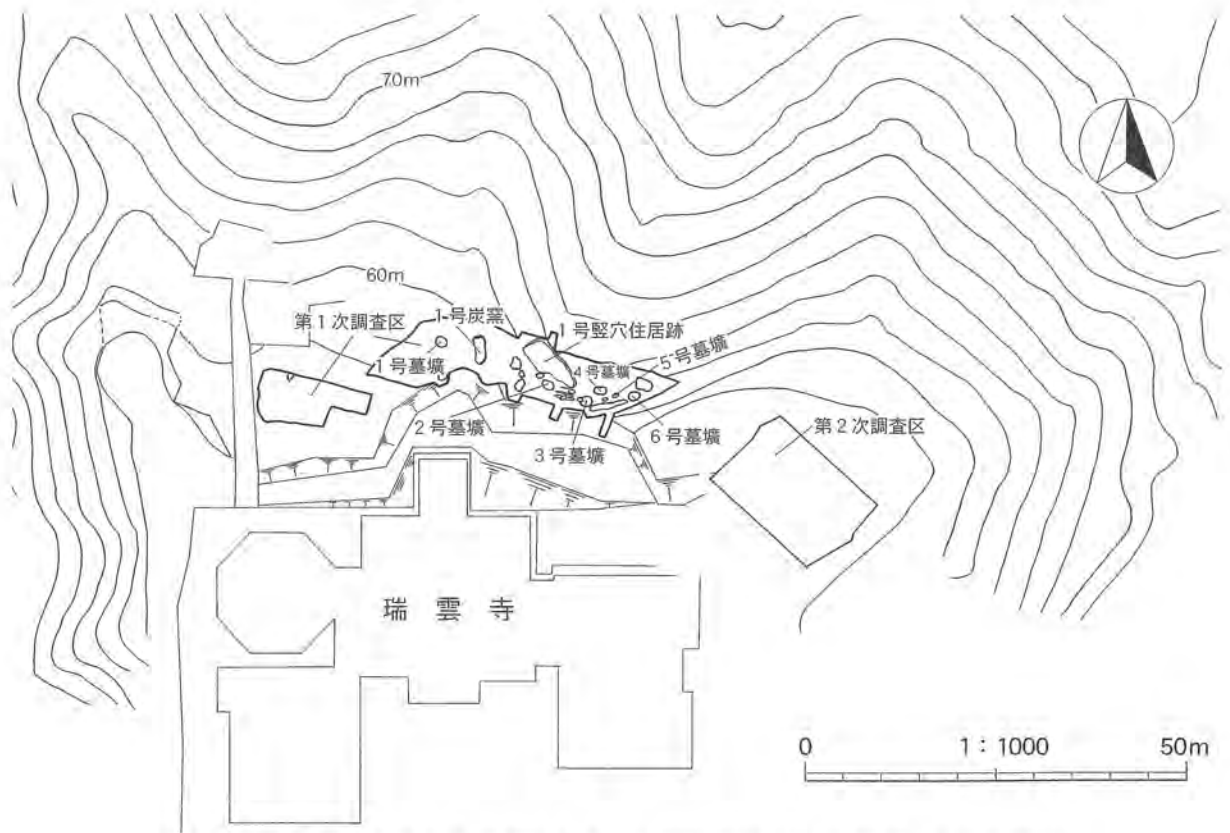
東7層 軟質で粘性がある。遺物は出土していない。

東8層 混火山灰層である。火山灰は市内で広範に確認される中振火山灰と考えられ、明黄褐色塊がブロックを形成している所もみられた。遺物は出土していない。

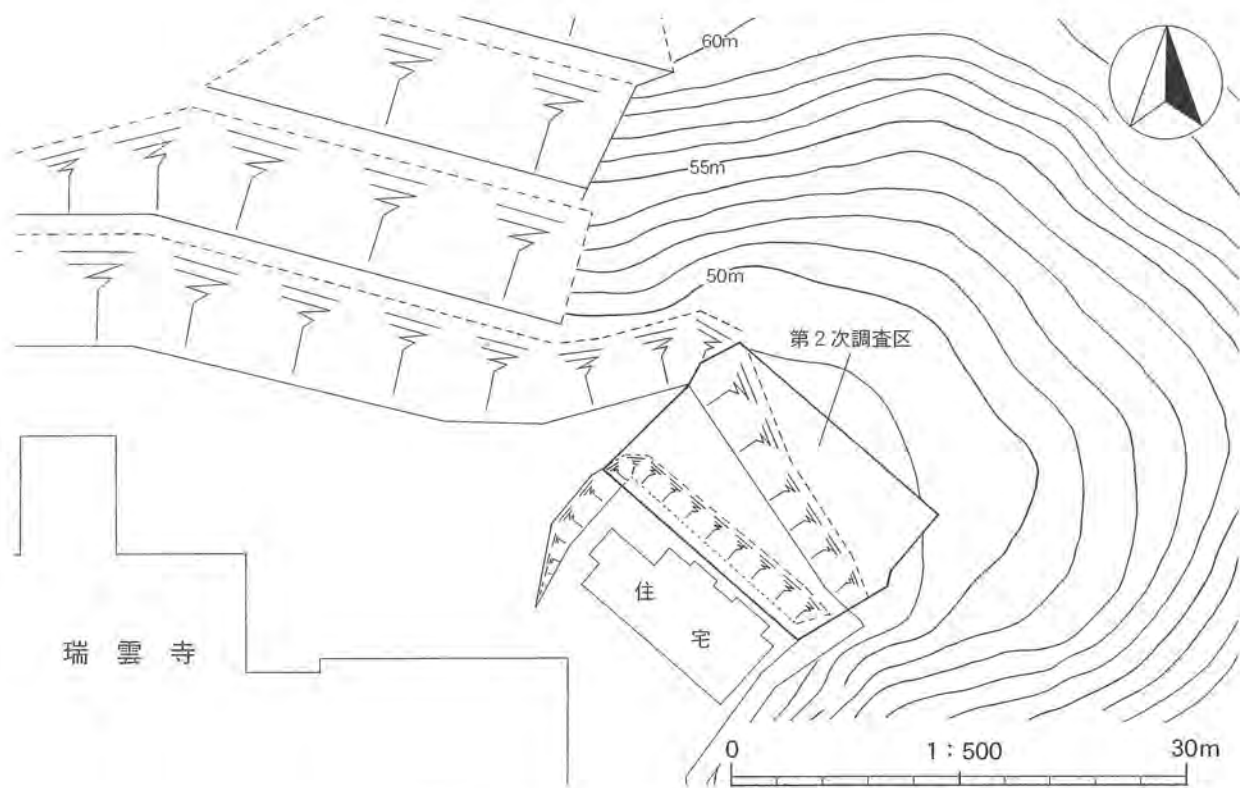
東9層 黒色土を基本土とする。無遺物層である。硬質で粘性がある。

東10層 無遺物層である。調査区西部にまで堆積している。この層以下、水分錆化による赤色土塊が目立つようになる。

東11層 暗褐色土、黒褐色土を基本土とする。地山直上層である。2層に細別され、東部端では真砂



第4図 第1次、第2次調査区位置図（平成15年当時の画面をもとに作成）



第5図 第2次調査区範囲図

土が多く混入している。無遺物層である。

西1層 2層に細別される。無遺物層である。

西2層 黒褐色土を基本土とする。土師器が出土している。調査区北西部において遺物が混在する層はこの層のみである。

西3層 黒褐色土を基本土とする。無遺物層である。

西4層 暗褐色土を基本土とし、明黄色褐色土塊が混入している。硬質で粘性がない。

西5層 褐色土を基本土とする。白色粒子、明黄色褐色土粒子を含んでいる。硬質で粘性がない。

西6層 暗褐色土を基本土とする。白色粒子、明黄色褐色土粒子を5層より多く含んでいる。

西7層 褐色土を基本土とする。混入物は6層と同じである。

谷は北部と南部に分かれる。調査区南部にあたる谷南部は最近の攪乱により北部との対応関係がほとんど把握できなかった。このため谷南部の層は別に扱う。

谷1層 3層に細別され、軟質で粘性がある。弥生土器が出土している。1a層は暗褐色土、カーボンを含んでいる。1b層は1a層に比べ暗く黒色土に近い。弥生土器が出土している。1c層は1b層に比べ暗さはないが1a層に比べやや暗くカーボンを塊状に含んでいる。北壁の土層観察から1号竪穴状遺構を消失させた流入土である。

谷2層 黒褐色土を基本土とする。カーボンを含んでいる。縄文土器が集中的に出土している。硬質で粘性がある。

谷3層 調査区北中央部に溜まっていた浅黄色土層で、真砂土、中礫火山灰塊の他、暗オリーブ褐色土、暗褐色土、黄褐色土が混入している。縄文土器が3点出土し、遺物包含層としては最下層にあたる。硬質で粘性がある。二次堆積土であろう。

谷4層 灰黄褐色土を基本土とし、谷に堆積している。基盤土の流れ込みと考えられる。

谷5層 極暗褐色土を基本土とする。黒褐色土、白色粒子を含んでいる。

谷6層 暗褐色土を基本土とする。4、5層同様、谷のみに堆積している。

以下は谷南部に堆積している。グライ化し青味がかった層と砂層がある。

谷A層 黒褐色土を基本土とする。土師器、弥生土器が出土している。

谷B層 黒褐色土を基本土とする。水分を多く含んでいる。土師器が出土している。

谷C層 暗灰黄色の砂層である。

谷D層 黒褐色土を基本土とする。水分の錆化がすすんでいる。無遺物層である。

谷E層 黒色土を基本土とする。錆化がすすんでいる。カーボンを少量含んでいる。無遺物層である。

谷F層 黒褐色土を基本土とし、暗灰黄色土、白色粒子を含んでいる。無遺物層である。

谷G層 調査区東部に堆積している。黒色土を基本土とする。無遺物層である。

谷H層 黒色土を基本土とする。黄灰色土、白色粒子を含んでいる。無遺物層である。

谷I層 黒色土を基本土とする。土師器、弥生土器、フレイクが出土した。

谷J層 黒褐色土を基本土とし、カーボン、白色粒子を含んでいる。以下の層は無遺物層である。

谷K層 黒褐色土を基本土とし、白色粒子を含んでいる。

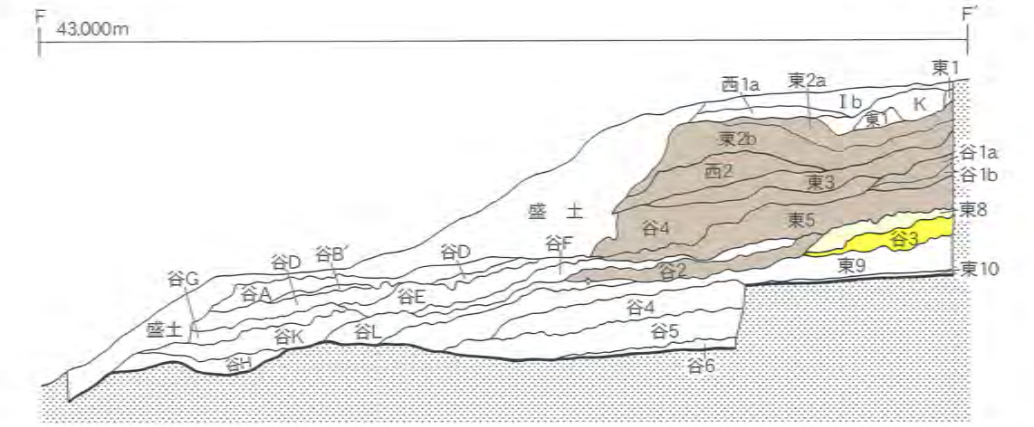
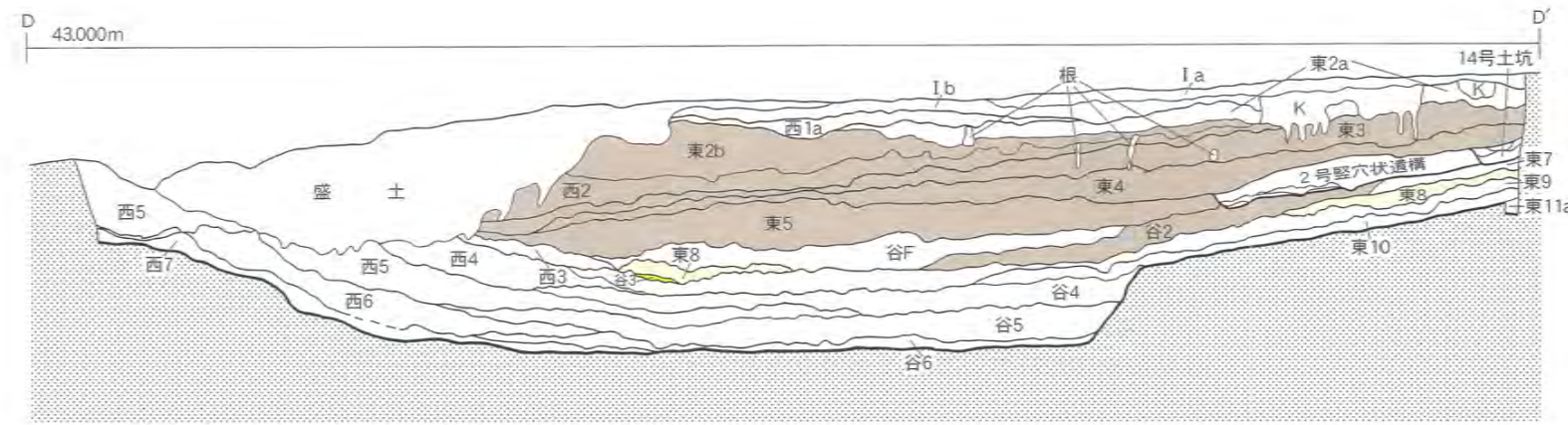
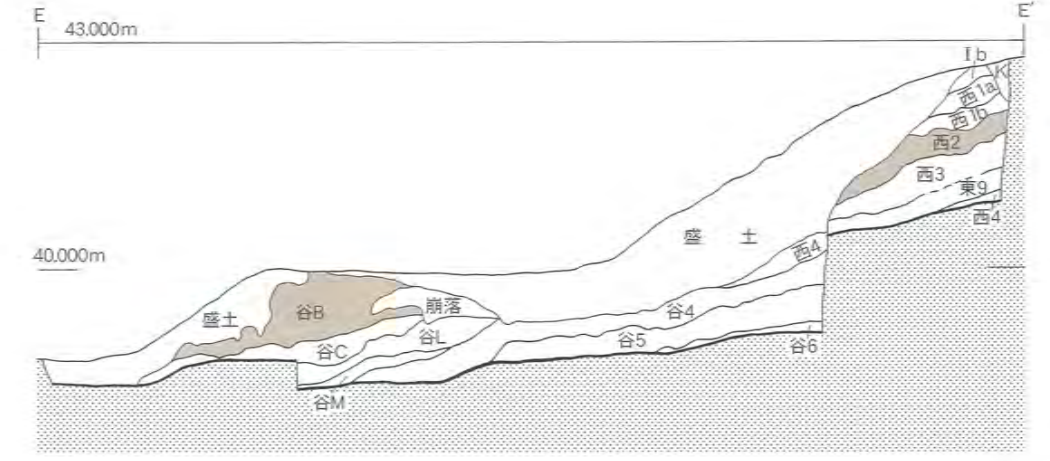
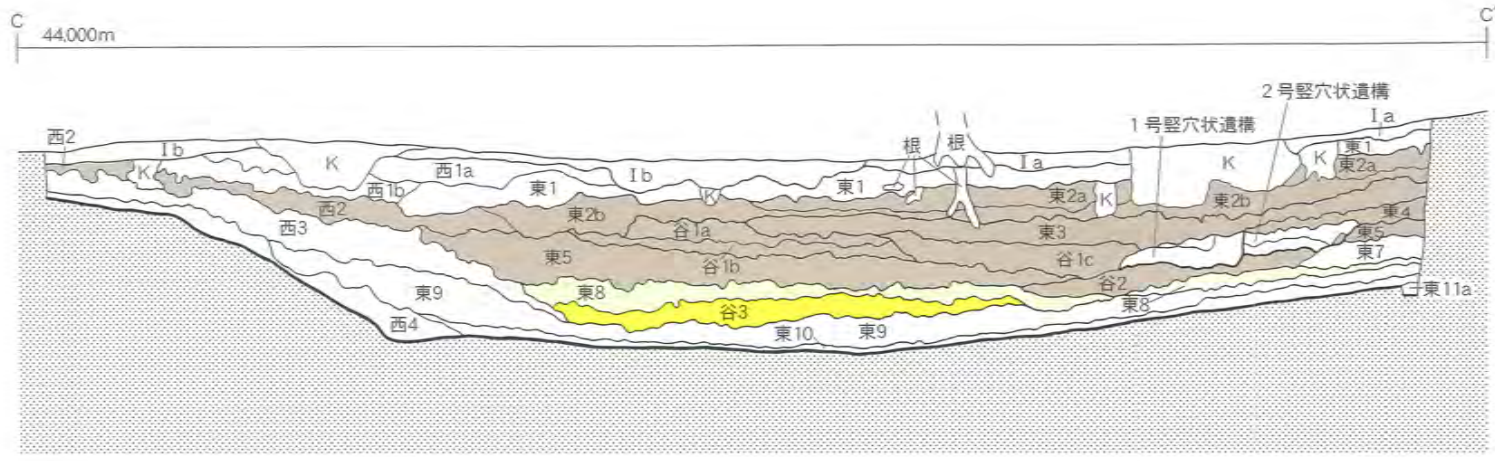
谷L層 灰褐色土を基本土とする。グライ化している。硬質で粘性がない。

谷M層 黄灰色土を基本土とする。白色粒子を含んでいる。硬質で粘性はややある。

谷南部の土層のうちA層からI層は、I層で土師器、弥生土器が出土することから、北部では谷I層またはその上層と時期的な整合性があるものと考えられる。



第6図 第2次調査区全体図・土層断面図(1)



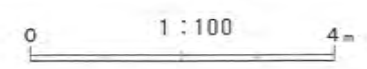
弘川館跡第2次調査調査区内基本土層注記表

層名	基本土	混入土	ミミロ・粘性・混入物
盛土	10YR5/2 灰褐色砂質壤土	—	硬質、粘性なし
表土	1号 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	2.5Y4/2 暗褐色砂質壤土2% 粒状 10YR3/3 暗褐色砂質壤土3% 粒状	軟質、粘性なし
	11号 10YR3/4 黒褐色シルト質壤土	2.5Y4/2 暗褐色砂質壤土1% 粒状 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土5% 粒状	軟質、粘性や中あり カーボン2%、塵
埋戻土	東1層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR3/3 暗褐色砂質壤土3% 粒状	中々硬質、粘性なし
	東2層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土3% 塊状 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土10% 粒状 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土1% 粒状	中々軟質、粘性や中あり カーボン2%、塵
埋戻土	東3層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR3/3 暗褐色砂質壤土3% 粒状	軟質、粘性や中あり カーボン3%、白色粘土2%
	東4層 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土	10YR2/2 黒褐色シルト質壤土2% 粒状 10YR3/3 暗褐色シルト質壤土10% 粒状 10YR4/2 にぶい黄褐色砂質土1% 粒状	軟質、粘性あり 白色粘土1%、塵
埋戻土	東5層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR2/2 黒褐色シルト質壤土2% 粒状 10YR3/3 暗褐色シルト質壤土3% 粒状 10YR5/6 黄褐色砂質土2% 塊状	中々硬質、粘性や中あり 白色粘土2%、塵
	東6層 10YR1/3 にぶい黄褐色シルト質壤土	10YR3/3 暗褐色シルト質壤土3% 粒状 2.5Y5/6 黄褐色シルト質壤土7% 粒状	中々軟質、粘性や中あり 白色粘土2%、塵
埋戻土	東7層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR2/2 黒褐色シルト質壤土3% 粒状 10YR4/2 にぶい黄褐色砂質土2% 塊状	軟質、粘性あり カーボン2%、白色粘土2%
	東8層 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土3% 粒状 10YR4/2 にぶい黄褐色砂質土1% 粒状 10YR4/2 灰褐色砂質土10% 粒状	軟質、粘性あり 白色粘土2%、塵
埋戻土	東9層 10YR3/2 黒褐色シルト質壤土	—	硬質、粘性や中なし 白色粘土5%
	東10層 10YR3/2 黒褐色砂質壤土	—	硬質、粘性や中なし、塵
埋戻土	東11層 10YR3/4 暗褐色砂質壤土	10YR2/2 黒褐色砂質土3% 粒状 10YR4/3 暗褐色砂質土1% 塊状	軟質、粘性なし
	西1層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR3/2 黒褐色砂質土7% 粒状	中々硬質、粘性なし
埋戻土	西2層 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR2/4 暗褐色砂質土3% 粒状 10YR4/3 暗褐色砂質土1% 塊状	中々硬質、粘性や中なし 白色粘土2%
	西3層 10YR3/3 黒褐色砂質壤土	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土5% 塊状 10YR2/2 黒褐色砂質土7% 粒状 10YR2/6 暗褐色砂質土3% 塊状	硬質、粘性なし 白色粘土10%、塵
埋戻土	西4層 10YR4/6 黄褐色シルト質壤土	10YR3/6 暗褐色砂質土2% 粒状	硬質、粘性なし 白色粘土7%、塵
	西5層 10YR3/4 暗褐色シルト質壤土	10YR6/6 暗褐色砂質土3% 粒状	硬質、粘性なし 白色粘土10%
埋戻土	西6層 10YR4/4 黄褐色シルト質壤土	10YR6/6 暗褐色砂質土3% 粒状	硬質、粘性なし 白色粘土10%

層名	基本土	混入土	ミミロ・粘性・混入物
埋戻土	谷1a 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/3 暗褐色砂質壤土1% 粒状	中々軟質、粘性や中あり カーボン3%、白色粘土1%
	谷1b 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土2% 粒状 2.5Y4/2 暗褐色砂質壤土1% 粒状	軟質、粘性あり カーボン2%、白色粘土1%
埋戻土	谷2 10YR3/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土10% 粒状	中々軟質、粘性や中あり カーボン2%、白色粘土10%
	谷3 10YR2/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/3 暗褐色シルト質壤土3% 塊状	硬質、粘性あり カーボン1%、白色粘土3%
埋戻土	谷4 10YR4/2 灰褐色砂質土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土5% 粒状 10YR5/6 黄褐色砂質土20% 塊状	硬質、粘性なし 白色粘土10%、塵
	谷5 7.5YR2/3 暗褐色シルト質壤土	10YR2/2 黒褐色シルト質壤土3% 粒状	硬質、粘性や中あり カーボン1%、白色粘土5%
埋戻土	谷6 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土1% 粒状	硬質、粘性なし 白色粘土3%、塵
	谷7 10YR3/3 暗褐色シルト質壤土	2.5Y4/2 暗褐色砂質土5% 塊状	中々硬質、粘性なし カーボン2%、白色粘土5%
埋戻土	谷8 10YR2/2 黒褐色砂質壤土	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土2% 粒状	軟質、粘性や中なし カーボン2%、白色粘土2%
	谷9 2.5Y3/1 黄褐色シルト質壤土	2.5Y4/1 暗褐色砂質土1% 粒状 10YR3/2 黒褐色砂質土5% 塊状 2.5Y4/1 暗褐色砂質土5% 塊状	硬質、粘性あり カーボン1%、白色粘土3%
埋戻土	谷10 7.5YR2/2 暗褐色シルト質壤土	10YR2/1 黒褐色砂質土20% 粒状	中々軟質、粘性あり カーボン2%、白色粘土5%
	谷11 10YR2/1 黒褐色シルト質壤土	2.5Y3/2 暗褐色砂質土5% 塊状	硬質、粘性なし 白色粘土7%
埋戻土	谷12 2.5Y3/1 黄褐色砂質土	2.5Y2/1 暗褐色シルト質壤土3% 塊状 2.5Y4/2 暗褐色砂質土3% 塊状	硬質、粘性なし 白色粘土3%
	谷13 10YR2/1 黒褐色シルト質壤土	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土1% 塊状	中々軟質、粘性あり 白色粘土2%
埋戻土	谷14 5Y2/1 黄褐色土	2.5Y5/1 暗褐色シルト質壤土2% 塊状 2.5Y5/2 暗褐色砂質土10% 粒状	軟質、粘性あり 白色粘土7%、塵
	谷15 2.5Y2/1 黄褐色土	10YR3/1 暗褐色シルト質壤土3% 塊状	中々軟質、粘性あり カーボン1%、白色粘土1%
埋戻土	谷16 2.5Y3/1 黄褐色シルト質壤土	2.5Y3/1 暗褐色シルト質壤土7% 塊状	中々軟質、粘性あり カーボン1%、白色粘土1%
	谷17 10YR3/2 黒褐色シルト質壤土	2.5Y2/1 暗褐色砂質土3% 塊状 2.5Y5/2 暗褐色砂質土10% 粒状 10YR3/3 暗褐色砂質土10% 粒状	軟質、粘性なし カーボン1%、白色粘土10%
埋戻土	谷18 2.5Y4/1 黄褐色シルト質壤土	—	硬質、粘性や中あり 白色粘土2%

堆積土層対応表

	東	西	谷(北部)	谷(南部)
上		1a		
			1b	
	1			
	2a			
	2b			
	3	2		
	4		1a	A
			1b	B
			1c	B'
				C
			2	D
下				E
				F
				G
			3	H
				I
			4	J
				K
			L	
		4	M	
		5		
		6		
		6		
		7		



第7図 第2次調査区土層断面図(2)

(2) 検出された遺構と遺物

第2次調査では炉跡を伴わず堅穴住居跡と判断し得ない堅穴状遺構3基と土坑1基が検出された。

1. 堅穴状遺構 (第8図～第10図)

1号堅穴状遺構

調査区北東隅、2号堅穴状遺構と重複して検出された。

検出状況 遺構南東部においては2号堅穴状遺構と覆土上面の観察により明確に重複関係が把握できたが、西部においては覆土の広がり不明瞭となり、調査区北壁の土層観察から遺構のほとんどが流失していることが分かった。基本土層谷1c層の堆積により削られたものと考えられる。2号堅穴状遺構との新旧関係は1号堅穴状遺構が新しく、2号堅穴状遺構が古い。

平面形 調査区外へ続いていることもあり不明である。

規模 残存する遺構部分の長軸が2m80cm、短軸が1m96cm、深さが22cmを測る。

壁 南東部では緩やかに立ち上がっている。

柱穴 1基検出された。長軸42cm、短軸40cm、深さ22cmを測り、平面形は不整形である。

床面 やや平坦である。明確な貼床は無いが、柱穴の周辺は若干堅く土が締まっていた。

埋土 自然堆積の様相を呈している。2層に大別され、A1層は黒色シルト質砂壤土を基本土とし、締まりは軟らかい。B1層は黒褐色砂壤土を基本土とし、硬く粘性がない。柱穴も2層に分かれ、a1層は黒色砂壤土を基本土とし、白色粒子を混入している。b1層は暗褐色砂壤土を基本土とし、a1層に比べ白色粒子の混入が少ない。

出土遺物 埋土から土器片が少量出土している。第10図1、2は1号堅穴状遺構から出土した土器で、1は無文地に横位、斜位の沈線を引きしている。弥生時代前期あるいは中期に属すると考えられる。2は底部破片で、斜縄文が底部下端まで施されている。

時期 不明である。

2号堅穴状遺構

調査区北東隅、1号堅穴状遺構、14号土坑と重複して検出された。

検出状況 遺構西部、北東部は覆土の広がり不明瞭であったが、1号堅穴状遺構と重複した所と地山を掘り込んでいた遺構南部で遺構として検出することができた。検出面は基本土層東4層直下である。覆土上面では黄褐色土塊が混じった暗褐色土(A1層)とその周りに広がる黒褐色土(B1層)の2層が観察できた。14号土坑との新旧関係は2号堅穴状遺構が古く、14号土坑が新しい。

平面形 調査区外へ続いているため全容は不明であるが、円形もしくは隅丸方形と考えられる。

規模 残存する遺構部分の長軸が3m28cm、短軸が3m44cm、深さが41cmを測る。

壁 南部では緩やかに立ち上がっている。

柱穴 1基検出された。長軸36cm、短軸34cm、深さ24cmを測り、平面形は不整形である。

床面 平坦であるが、東西方向はやや傾いている。明確な貼床は確認されなかった。

埋土 5層に細別されるが、4層に大別される。自然堆積の様相を呈している。A1層は暗褐色砂壤土を基本土とし、にぶい黄褐色土塊を混入している。やや軟質で粘性はなくパサパサしている。B1層は黒褐色砂壤土を基本土とし、軟質で粘性がない。B2層は東部に堆積した土で、B1層と色調は似ているが、浅黄色土を塊状に混入している。C1層は暗褐色砂壤土を基本土

とし、褐色土を粒状に5%混入している。軟質で粘性がない。D1層は南部の壁際に見られる土で、にぶい黄褐色砂壤土を基本土としている。柱穴の埋土は2層に大別される。a1層は黒褐色砂壤土を基本土とし、カーボン粒を1%混入している。軟質で粘性がある。b1層は暗褐色砂壤土を基本土とし、混入土はなく密である。

出土遺物 A1層、B層で土器片が多く出土している。第10図3～34、40は2号竪穴状遺構から出土した遺物である。3～6は同一個体である。口縁部破片で器形は外に開いている。口縁部に沿った横走の撚糸文を施文した後、2条の平行沈線を3列引き沈線に交互刺突文を施している。7は斜走の撚糸文を施している。8、9は3～6と同一個体と考えられる胴部破片である。10～11は楕円状の沈線内に横位の沈線を引いている。12は2条の曲線状の沈線を引いている。13～21は撚糸文に直線的な沈線を引いた胴部破片である。鋸歯状(13、15、16)と2条の平行沈線(14、17～21)からなる。22～34は撚糸文を施した胴部破片である。条の間隔の空いたもの(22～27)と条の間隔が密のもの(28～34)がある。22、23、26、27は縦走の撚糸文を施している。24、25は同一個体と考えられ、羽状の撚糸文からなり、内面には煤が付着している。28、29、34は羽状と縦走の撚糸文を施している。30、31は縦走の撚糸文を施している。32、33は器形が内傾しており頸部破片と考えられる。3～8は弥生時代後期に見られる文様であり、24、25も当該期の特色のある文様である。また、その他についても胎土、色調等の観察により上記の土器に似ており、多くは弥生時代後期の破片であると考えられる。40は凹基の石鎌である。二等辺三角形を呈し、規模は最大長が1.9cm、最大幅が1.5cm、最大厚が0.3cmを測る。両側縁部に対しやや斜め、基部に対し垂直に調整剥離を施している。

時期 床面の遺物がないため特定できないが、埋土の遺物から弥生時代後期かそれ以降と考えられる。

3号竪穴状遺構

調査区北東部1、2号竪穴状遺構の南で検出された。

検出状況 斜面部において地山を掘り込んで落ち込みを確認した。しかし調査区東部の旧地形の改変によりそのほとんどは削り取られ消失している。

平面形 遺構のほとんどが削り取られているため、平面形は不明である。

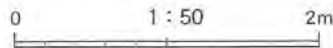
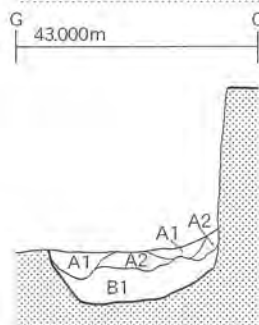
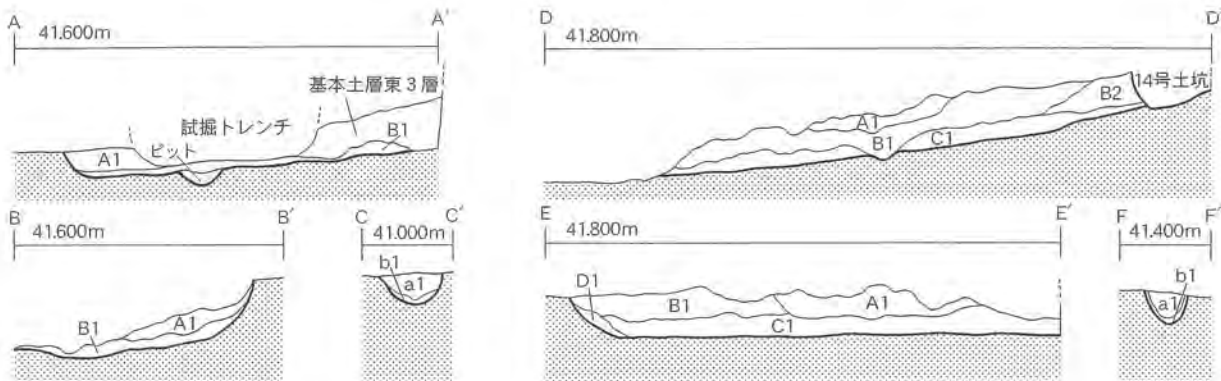
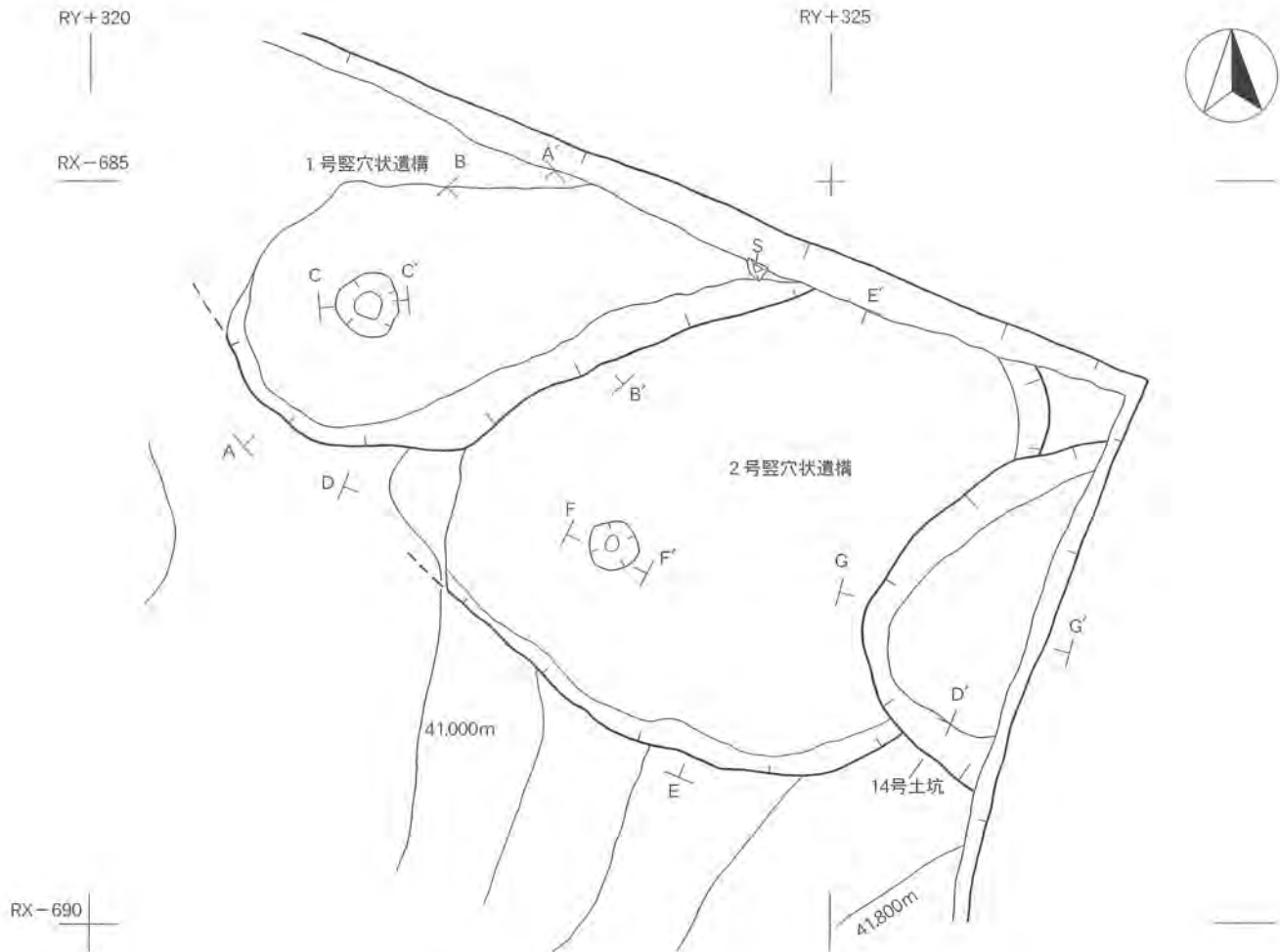
規模 残存する遺構部分の長軸が3m42cm、短軸が1m14cm、深さが50cmを測る。

壁 北部では緩やかに立ち上がっている。東部ではなだらかに立ち上がっている。

柱穴 2基検出されたが一部消失している。ピット1の規模は長軸24cm、短軸20cm、深さ20cmを測り、平面形は不整楕円形と思われる。ピット2の規模は長軸28cm、短軸26cm、深さ22cmを測り、平面形は楕円形と思われる。

床面 残存する部分では平坦である。貼床は確認されなかった。

埋土 9層に細別されるが、5層に大別できる。自然堆積の様相を呈している。A層は遺構の東端部から中央部にかけて堆積し、黒褐色砂壤土を基本土としている。A1層はにぶい黄褐色土塊、カーボン粒を含んでいる。やや硬質で粘性はない。A2層は地山土である真砂土を混入している。A3層はA1層に似ているが、色調がやや明るい。B層は遺構中央部から西部にかけて堆積し、真砂土を比較的多く混入している特徴がある。B1層は淡黄色砂壤土で、真砂土を主体とした層である。黒褐色砂壤土が混入している。やや硬質で粘性がなくザラザラしている。



14号土坑土層注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
埋土 A1	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色砂壤土5% 塊状 2.5Y/3 淡黄色粘質砂土10% 塊状	軟弱、粘性あり カーボン1%、塵
埋土 A2	10YR2/2 黒褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色砂壤土1% 塊状 2.5Y7/4 淡黄色粘質砂土1% 塊状	軟弱、粘性なし カーボン1%、塵
埋土 B1	10YR3/2 黒褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土1% 塊状 2.5Y/3 淡黄色粘質砂土1% 塊状	やや軟弱、粘性なし 白色粒子3%

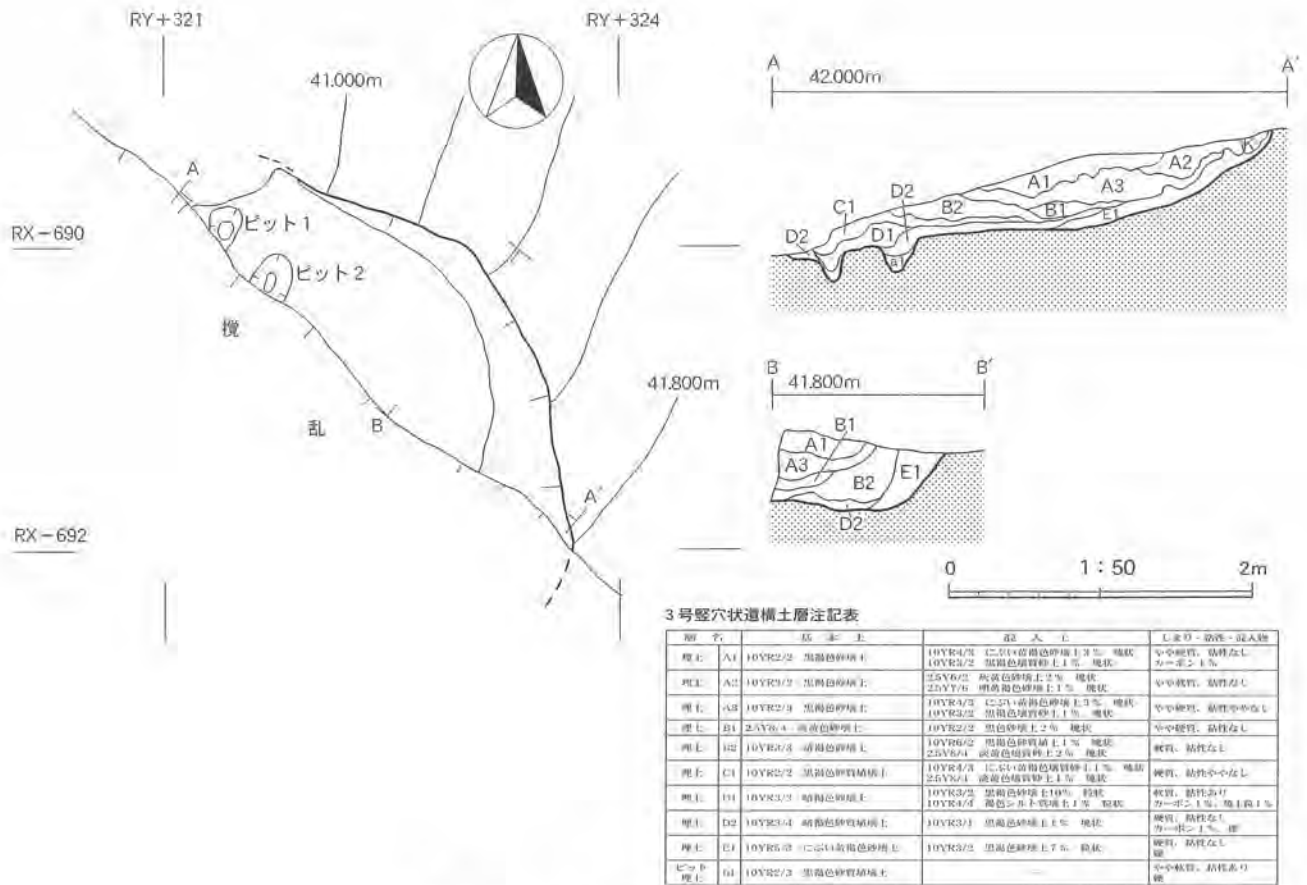
1号竪穴状遺構土層注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
埋土 A1	10YR2/1 黒色シルト質砂壤土	10YR3/3 暗褐色砂壤土2% 塊状	軟弱、粘性ややなし 塵
埋土 B1	10YR2/1 黒褐色砂壤土	10YR2/3 暗褐色砂壤土5% 塊状	硬質、粘性
ピット埋土 a1	10YR2/2 黒色砂壤土	10YR4/3 暗褐色粘質砂土2% 塊状	軟弱、粘性なし カーボン、白色粒子7%
ピット埋土 b1	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/3 暗褐色粘質砂土1% 塊状	硬質、粘性あり 白色粒子1%

2号竪穴状遺構土層注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
埋土 A1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/4 に近い黄褐色砂壤土2% 塊状 10YR3/2 暗褐色砂壤土10% 塊状	やや軟弱、粘性なし 塵
埋土 B1	10YR2/2 黒褐色砂壤土	10YR2/1 黒褐色砂壤土1% 塊状	軟弱、粘性なし カーボン1%、塵
埋土 B2	10YR2/1 黒褐色砂壤土	2.5Y7/4 淡褐色砂質粘土1% 塊状 10YR3/3 暗褐色粘質砂土2% 塊状	やや軟弱、粘性なし 白色粒子3%
埋土 C1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土5% 塊状	軟弱、粘性なし 塵
埋土 D1	10YR4/3 赤褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色砂壤土1% 塊状	硬質、粘性ややなし カーボン1%、塵
ピット埋土 a1	10YR2/3 黒褐色砂壤土	10YR3/3 暗褐色砂壤土1% 塊状	軟弱、粘性あり カーボン1%、塵
ピット埋土 b1	10YR3/3 暗褐色砂壤土	-	軟弱、粘性なし

第8図 1号、2号竪穴状遺構、14号土坑平面・断面図



第9図 3号竪穴状遺構平面・断面図

B2層は暗褐色砂壤土を基本土とし、B1層の基本土を塊状に含んでいる。C1層は遺構西端にのみみられる。黒褐色砂質埴壤土を基本土とし、真砂土、にぶい黄褐色土粒が少量混入している。硬質で粘性はややない。D層は床直上層で暗褐色土を基本土としている。D1層は褐色土粒、カーボン粒、焼土粒を少量含んでいる。軟質で粘性がある。D2層は黒褐色土塊、カーボンを少量含んでいる。硬質で粘性はない。E1層は壁際に堆積した崩落層と考えられる。にぶい黄褐色土を基本土とし、黒褐色土粒を多く含んでいる。ピットの埋土は共通で単層である。黒褐色砂壤土を基本土とし、混入土がなく密である。やや軟質で粘性がある。

出土遺物 A1層、C1層、D1層から1点ずつ出土している。第10図39はD1層から出土した土器片で間隔の空いた縦走の撚糸文を施文している。弥生時代後期に属すると考えられる。

時期 時期を特定できる属性がなく不明である。

14号土坑

調査区北東隅、2号竪穴状遺構と重複して検出された。

検出状況 基本土層第5層中の遺構確認において最初に検出した遺構で、覆土上面は2層に分かれていた。覆土上面の観察から2号竪穴状遺構との新旧関係を知ることができた。

平面形 遺構が調査区外へ続いているため不明である。

規模 調査した部分の規模は、長軸が2m51cm、短軸が1m9cm、深さが32cmを測る。

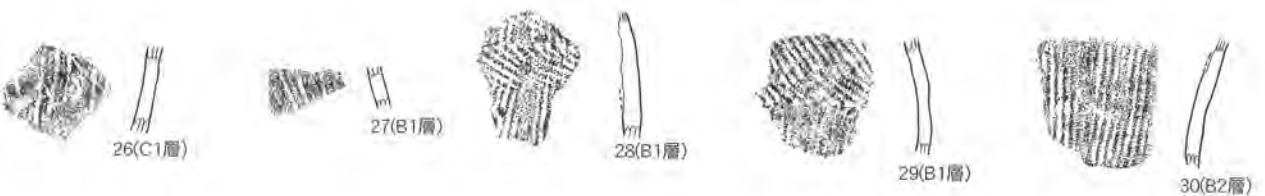
壁 西部では緩やかに立ち上がっている。

土坑底面 楕円形を呈している。

1号竖穴状遺構



2号竖穴状遺構



14号土坑



3号竖穴状遺構



0 1:3 10cm



0 2:3 5cm

第10図 遺構内出土遺物

埋土 3層に細別されるが、2層に大別できる。A層は遺構の上面に堆積し、黒褐色砂壤土を基本土としている層で2層に細分される。A1層は真砂土に似た淡黄色土を塊状に多く混入している特徴がある。その他、カーボンを含んでいる。軟質で粘性がある。A2層はA1層に混入していた淡黄色土は極少量で、カーボンを含んでいる。硬質で粘性はない。B1層は黒褐色砂壤土を基本土とし、やや軟質で粘性はない。

出土遺物 A2層を中心に土器片が出土している。第10図36～39は14号土坑から出土した土器である。35は11と近似し、同一個体の可能性がある。37～38は縄文あるいは燃糸文を施している。

時期 判断材料がなく不明である。

2. 遺構外出土遺物（第11図～第14図）

遺構外からは約1,400点出土している。調査区北部での出土が大半を占めている。

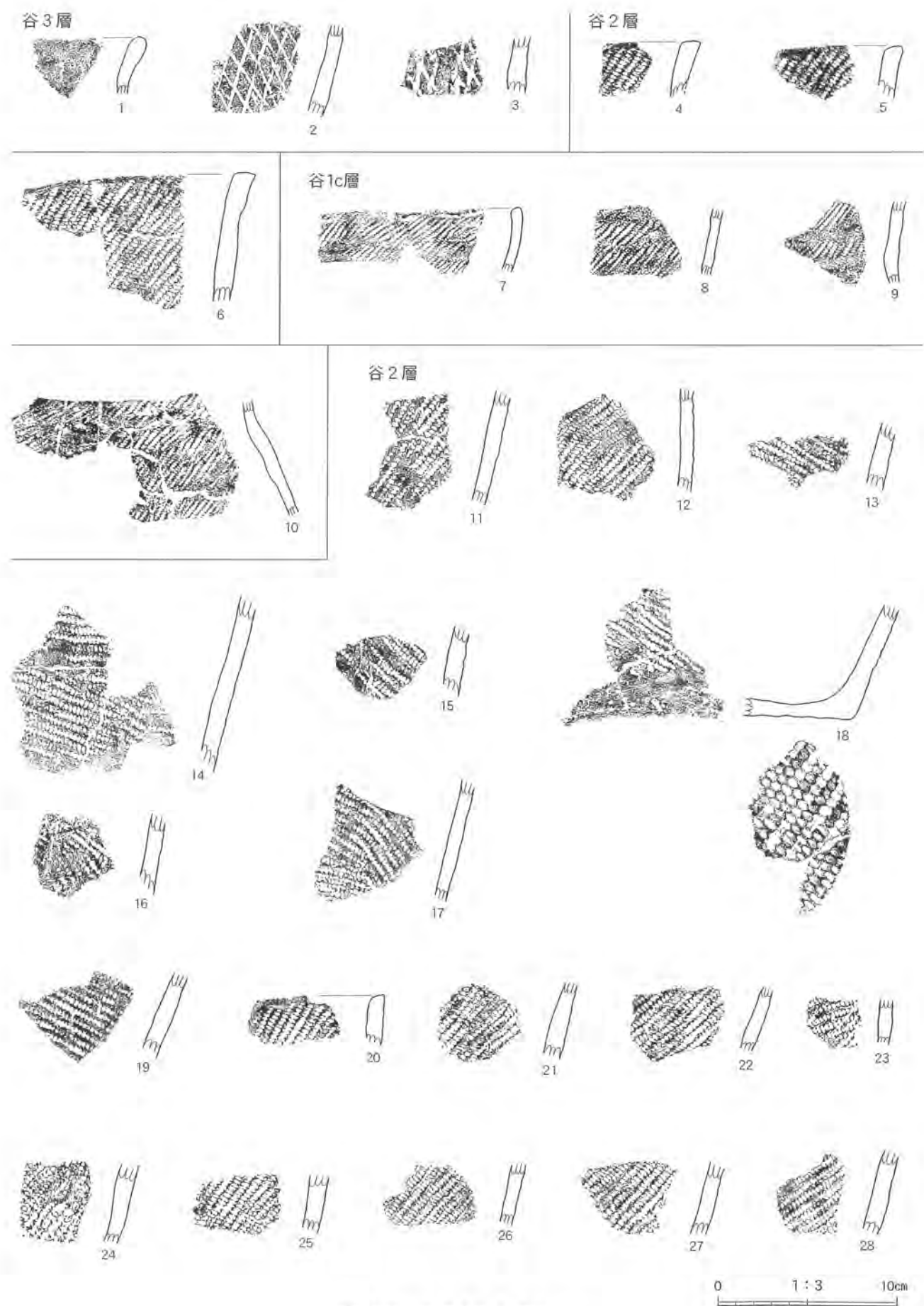
1～3は基本土層谷3層の谷底に溜まっていた火山灰もしくは真砂土からなる層から出土した土器片で第2次調査の最下層遺物である。器面の色調はどれも橙色で同一個体と思われる。1は口縁部破片で器形は外に開き、口唇部は丸頭状を呈している。2、3は胴部破片で、網目状燃糸文を施している。縄文時代前期大木4式と考えられる。4～32は縄文のみ施文されている。4～6は同一個体で、基本土層谷2層から出土している。口縁部破片で器形は外に開き、口唇部は平坦である。RL縄文を縦位に施文している。7～9は同一個体で、基本土層谷1c層から出土している。7は器形が内湾した口縁部破片でLR縄文を横位に施文している。10は7～9に色調、胎土が似ており、出土層位も同じである。内傾しており壺形の頸部から肩あたりの部位であると思われる。11～32は4～6同様、基本土層谷2層から集中して出土している。11、12は同一個体である。RL縄文を縦位に施文している。13～19は同一個体である。RL縄文を横位、斜位に施文している。18は底部破片で、網代痕が残っている。網代の編み方は線の条が1本超え、1本潜り、1本送りと思われる。20～28は同一個体である。LR縄文を横位に施文している。29から32は同一個体関係が不明のものである。

33～46は遺構内出土遺物との比較から弥生後期の土器と考えられる。33は口縁部破片で、交互刺突文を施している。34は交互刺突文と燃糸文からなる。35は弧状の沈線を3本引き、条の間隔が空いた燃糸文を施文している。36～46は燃糸文を施している。36、37、40、41、43～46は条の間隔が空き、それ以外は条の間隔が密である。これらは条の方向が羽状のもの（36、39、45）、縦走のもの（38、41、44）、斜走のもの（37、40、43、46）、縦走と斜走の組み合わせからなるもの（42）とに分類できる。

47、48は底部破片である。47は網代痕が残っている。磨滅が著しいが、網代の編み方は18と同じと考えられる。48は底部下端まで条の間隔が空いた燃糸文を施文している。文様の特徴から弥生後期の底部破片と考えられる。

49～54は土師器である。49、50は口縁部から胴部にかけての部位で、器種はともに甕である。49は緩やかに外反している。外面調整は口縁部下端の横方向のヘラナデと胴部の縦方向のヘラナデある。焼成は良好で胎土に礫が混入している。50は緩やかに外反し、外面調整は口縁部下端の横方向のヘラナデ、内面調整は強いヘラナデである。51～54は底部破片である。51～53は底面に木葉痕を残している。この他、図示できなかったが、内黒の胴部破片も出土している。

55～62は須恵器または還元焰焼成を示す色調が灰色の硬質な土器である。叩き目痕があり、平行文



第11圖 遺構外出土遺物 (1)

(55～58、62)、縄目状(60、61)、格子目状(59)に分かれる。56～58は同一個体と考えられる。横方向のヘラナデ調整後にタタキ調整を行っている。62は他に比べ薄手である。

63～70は近世の磁器、陶器である。盛土層から出土したものである。磁器は染付で染付部分は塗りつぶしまたは網点のトーンで表現している。63は肥前系の桶形の猪口で、底部は蛇ノ目凹形高台である。口径7.4cm、底径5.3cm、器高5.4cmを測る。外面には矢羽根文が描かれている。64は肥前系碗の蓋と考えられるが天地を逆にして小皿の可能性もある。口径は9.3cm、器高2.4cmを測る。外面に蛸唐草文が描かれている。65は肥前系の碗で、草花文が描かれている。底径4.3cm、器高3.2cmを測る。66は底径が大きく皿と思われる。底部は蛇ノ目凹形高台である。67は肥前系の碗の口縁部片で、内外面に二重網目文が描かれた「くらわんか手」碗である。68は内外面の釉が黄色味をおびる。底径8.4cm、器高3.1cmを測る。69、70は陶器で挿鉢である。74は9ないし10本を1単位としている。

71は器種不明で土製品と考えられるが、性格は不明である。

72～79は石器である。石器の各規模は下の観察表に掲載している。72、73は凸基の、74は凹基の石鏃である。72は木の葉型の小形石鏃で、頁岩製である。両面ともに微細な剥離調整を施している。73は細長の小形石鏃で、石材不明である。腹面は細かい剥離調整を施している。74は先端が欠損している。腹面に横長の剥離調整を施し、背面には横長の剥離調整後に先端方向から大きい剥離を施している。頁岩製である。75は筥状のスクレーパーと思われる。石材は黒色頁岩である。腹面は刃部方向からの大きい調整を施してから刃部を調整している。背面は刃部以外粗い調整である。76～78はフレイクである。石材は77が珪質頁岩製、76、78が黒色頁岩と思われる。78は先端が尖っているためドリル状の製作過程であったとも考えられる。79は叩き石で、中央に2箇所凹みが見られる。

80、81は銭貨である。規模は下の観察表に掲載している。80は寛永通宝で、背に青海波文がある。81は一銭硬貨である。製造年は不明である。

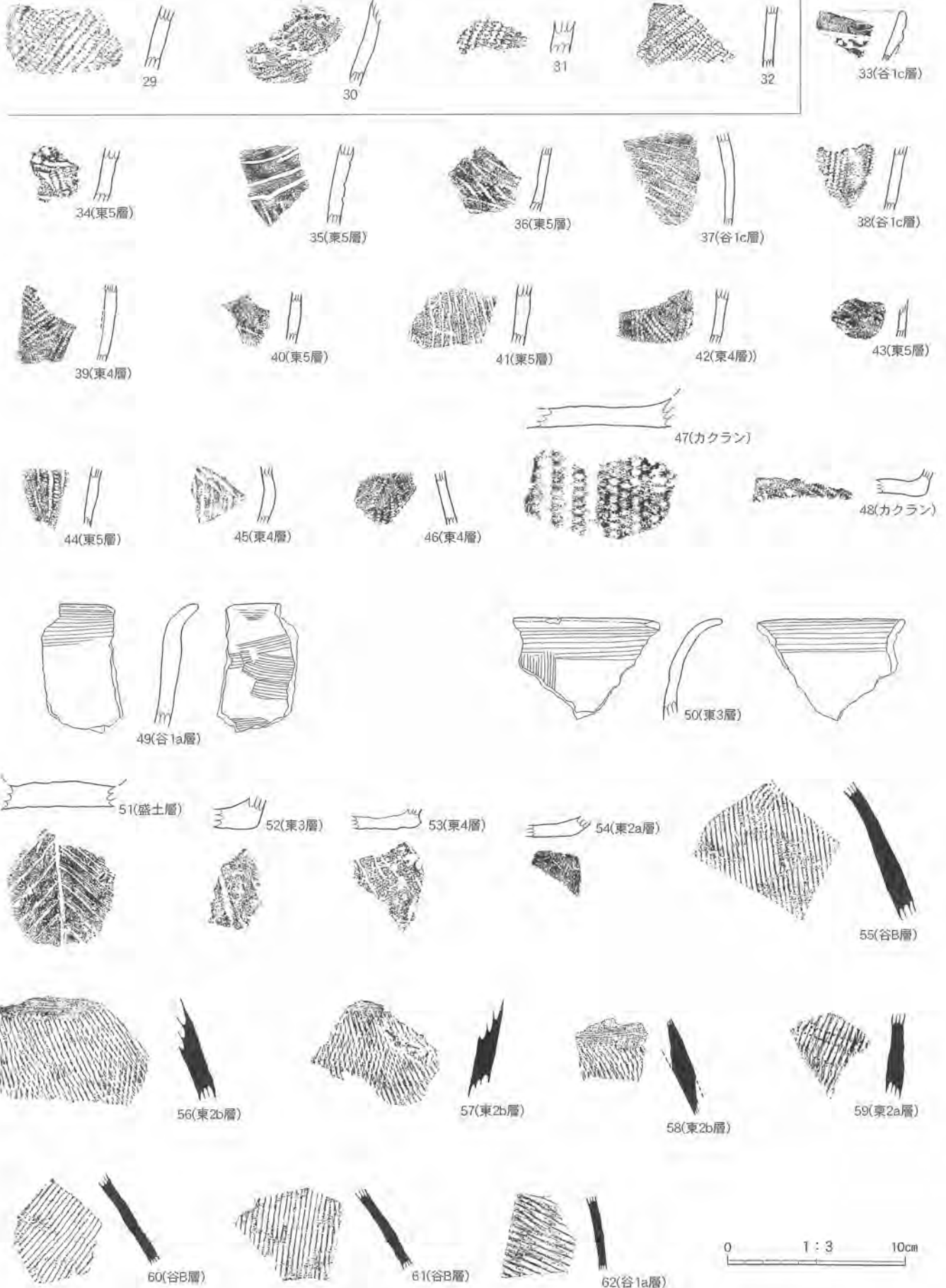
第1表 遺構外出土石器観察表

挿図番号	番号	地点	層位	器種	現存する規模 (cmまたはg)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
10	40	2号竪穴状遺構	B1層	石鏃	1.98	1.51	0.32	0.6	凹基
14	75	遺構外	谷1c層	石鏃	1.85	1.26	0.27	0.4	凸基
14	76	遺構外	東6層	石鏃	2.74	1.06	0.28	0.8	〃
14	77	遺構外	東5層	石鏃	3.25	2.03	0.56	2.7	凹基
14	78	遺構外	谷I層	スクレーパー	5.67	3.52	2.13	40.5	
14	79	遺構外	東5層	フレイク	4.02	3.69	1.60	13.6	
14	80	遺構外	谷1c層	フレイク	2.83	3.12	1.43	12.3	
14	81	遺構外	谷1c層	フレイク	3.30	3.91	1.12	19.4	
14	82	遺構外	盛土層	叩き石	12.95	6.73	5.67	700	凹部を2ヶ所有する。

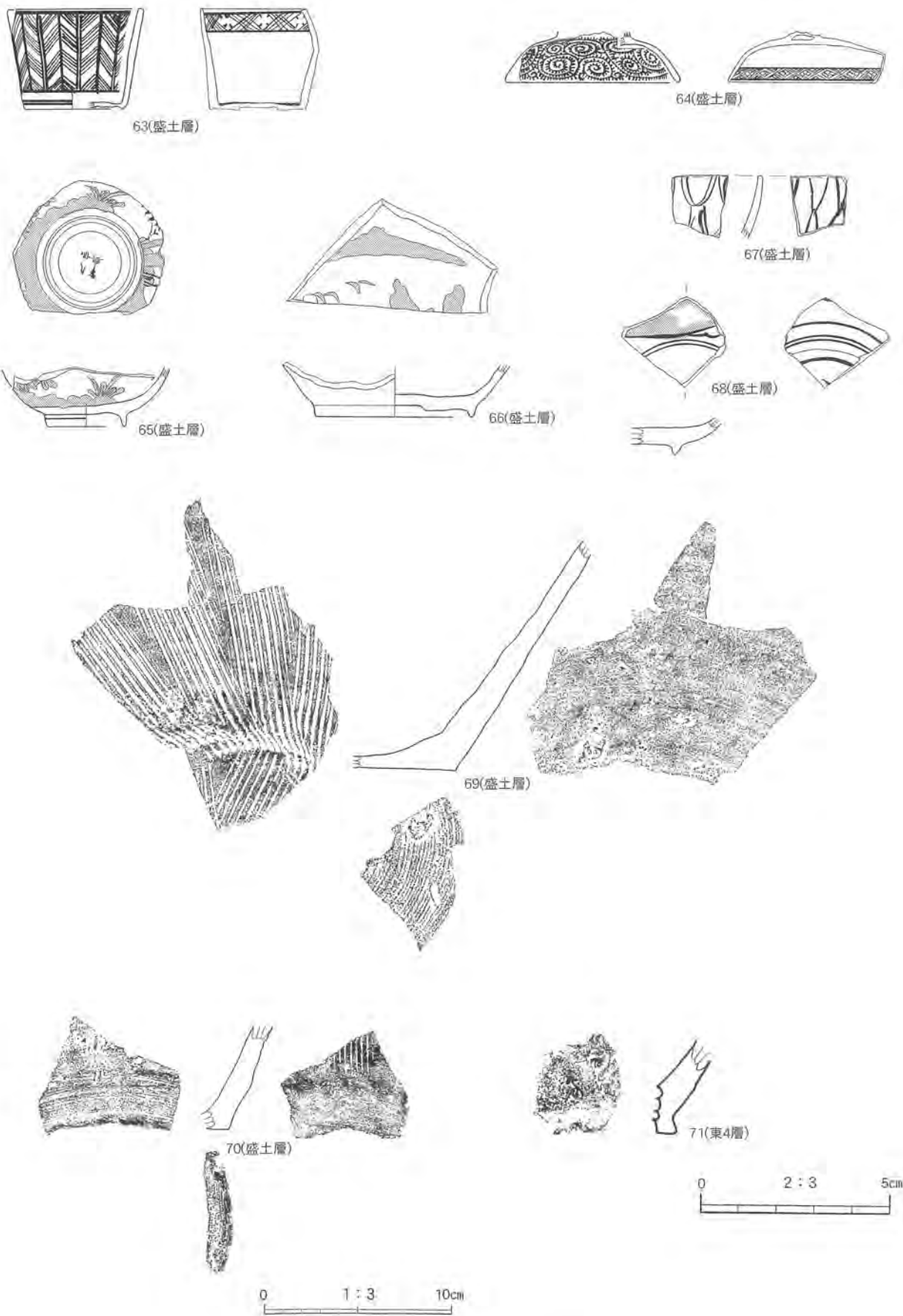
第2表 遺構外出土銭貨観察表

挿図番号	番号	地点	層位	器種	現存する規模 (mm)				備考
					外径	穿孔	外輪厚	外輪幅	
14	84	遺構外	盛土層	寛永通宝	2.9	0.7	1.5	3.6	新寛永通宝
14	85	遺構外	盛土層	一銭硬貨	1.5				製造年不明

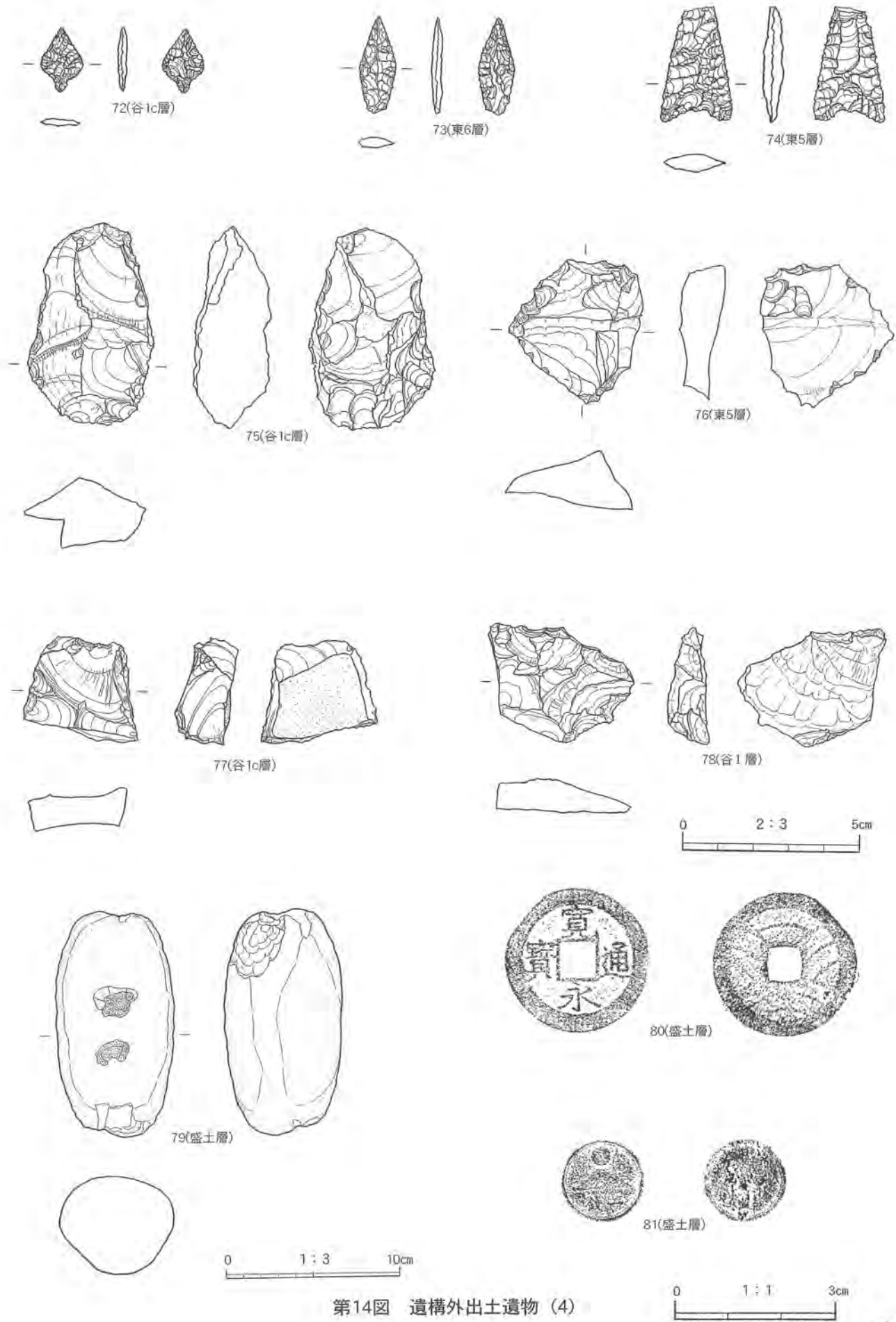
谷 2 層



第12図 遺構外出土遺物 (2)



第13図 遺構外出土遺物 (3)



第14図 遺構外出土遺物(4)

4 調査のまとめ

弘川館跡第2次調査では3棟の竪穴状遺構と1基の土坑を検出し、縄文土器、弥生土器の他、石器、土師器、須恵器、近世の磁器・陶器、銭貨などが出土した。竪穴状遺構、土坑は調査区北東隅から検出され、残存状況は悪く時期決定できる資料は確認されなかったが、埋土中からは弥生時代後期の土器片が特に2号竪穴状遺構で出土した。また、谷を中心とした調査であったため、流入土が厚く堆積し、表土下2m以上の深さから縄文時代前期中葉の土器片が出土するなど遺物包含層が確認された。

遺構について補足すれば、2号竪穴状遺構の時期については弥生時代後期の土器が主体に出土したこと、周辺からも当該期の土器しか出土しなかった点から、概ね弥生時代後期と考えられる。他の遺構についても、検出面が同じであることから時期は弥生時代後期の可能性が高い。

遺物については縄文土器は縄文のみ施文した土器が主体であったため、時期不明のものがほとんどである。出土層位、文様の点から分類すると谷3層から出土した網目状撚糸文の3点をI群1類、谷2層から出土した土器群をI群2類、それ以外のものをI群3類とすることができる。いずれも谷の流入土から集中して出土しているため、調査区より北へ離れた谷頭、尾根下の斜面や裾に縄文時代の遺構が存在すると考えられる。弥生時代後期の土器については文様の特徴により幾つかに分類できる。

- II群1類 器種が甕で交互刺突文を施しているもの。撚糸文を地文とした2号竪穴状遺構の土器をa種(第10図3～9、第12図34)、無文地のものをb種(第12図33)とする。
- II群2類 器種は不明で撚糸文を地文とし沈線を施しているもの。沈線文により楕円状などの曲線文からなるものをa種(第10図10～12、36、第12図35)、平行沈線文からなるものをb種(第10図13～21)とする。
- II群3類 器種は不明で地文が撚糸文のもの。条の間隔が空いているものをa種(第10図22～27、38、第12図36、37、40、41、43～46、48)、条の間隔が密のものをb種(第10図28～31、第12図38、42)とする。なお、文様が斜縄文のものは当該期に含まれるか不明であるので、ここでは対象としない(第10図2、32～34、37、39)。

2号竪穴状遺構出土土器はII群1類a種(第10図3～9)とII群2類a、b種(第10図10～21)からなり、土器の胎土や色調が似ていることから組み合わせで1個体になることも考えられる。市内の長根I遺跡では交互刺突文、弧線文、縦走撚糸文からなる甕が出土しているが、2号竪穴状遺構出土土器の市内における類例として長根I遺跡の土器をあげることができる。

弘川館跡第1次調査では遺構外で弥生土器が出土している。その中で外面が磨かれ、条の間隔が空いた羽状・縦走の撚糸文を施した胴の膨らんだ土器(報告書第33図10)と平行沈線、鋸歯状沈線と撚糸文からなる土器(報告書第33図3～8)が出土している。前者はII群3類a種に該当しよう。後者はII群2類と3類の組み合わせとすれば、新たにII群4類とすることができよう。

市内では上記の長根I遺跡の他、赤前IV八枚田遺跡、千鷲IV遺跡、芋野II遺跡、大付遺跡などで出土しているが、出土遺物を概観するとこれらは上述した分類にあてはめられると考えられる。当該期には天王山式、赤穴式の型式名があるが、今回は両型式の土器が混在しているのではないだろうか。今後型式学的な再検討が課題である。

今回の調査では遺構は少なかったが、出土遺物だけをみると第1次調査と内容が似ている。以上、弘川館跡が縄文時代から近世に亘る複合遺跡であることが追認できたことを最後に述べ、弘川館跡第2次調査の総括としたい。

付 編

払川館跡第1次調査出土の金属製品4点について

ここで取り上げる資料は、平成16年に調査された払川館跡第1次調査で竪穴住居跡もしくは墓跡で出土した鉄製品、銅製品の一部分である。報告書作成時には保存処理前であったため、錆の付着により遺物の形状・規模が不明のものがあったが、報告書刊行後に保存処理が完了したことからこの場を借りて改めて報告するものである。

1、2は1号竪穴住居跡から出土した鉄製品の一部分である。竪穴住居跡からは、カマド左袖周辺から6点出土している（報告書第11図10～15、写真図版PL13）。1（報告書第11図14）は刀子である。刃部が明確になり、背は後述の刀子よりも厚みがある。2（報告書第11図15）は報告にあるように鏃で、ねじれて変形している

3、4は1号墓跡から出土した鉄製品と銅製品である。3は輪銭、鳩目銭などと呼ばれている無文銭の一種である。第1次調査の報告では8枚重なっているものと3点重なっているものが1号墓跡から出土したと報告しているが、「8枚」は「9枚」の誤りであることが保存処理により明らかになった。ここで訂正する。4は刀子である。関と呼ばれる刀身部と茎部の間はより明確になっている。



第1次調査出土鉄製品

第3表 第1次調査出土金属製品観察表

番号	地 点	層 位	器 種	現存する規模 (cm)			備 考
				最大長	最大幅	最大厚	
1	1号竪穴住居跡	床面	刀子	6.0	1.26	0.8	
2	1号竪穴住居跡	床面	鏃	—	0.64	0.37	ねじれている
3	1号墓坑	A 4	輪銭	—	—	—	9枚重なっている
4	1号墓坑	A 4	刀子	20.56	1.21	0.26	

参考文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集
- 宮古市教育委員会 1991 『払川Ⅰ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書29
- 宮古市教育委員会 1999 『赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田 赤前Ⅴ柳沢遺跡 赤前釜屋ヶ沢遺跡 小掘内Ⅲ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書53
- 宮古市教育委員会 1999 『千鷲Ⅳ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書54
- 宮古市教育委員会 2003 『下在家Ⅰ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書62
- 宮古市教育委員会 2005 『払川館跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書64
- 宮古市教育委員会 2006 『八木沢古館 八木沢中田遺跡 八木沢駒込Ⅰ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書67
- 田村忠博 1986 『宮古地方の中世史 古城物語』

写 真 图 版



1. 弘川館跡第2次調査区調査前近景（西→）



2. 試掘トレンチ設定時近景（西→）



3. 完掘時近景 1 (南東→)



4. 完掘時近景 2 (北西→)



5. 調査区内D-D' 土層断面 (南西→)



6. 調査区内C-C' 土層断面 (南西→)



7. 調査区内A-A' 土層断面 (西→)



8. 調査区北部谷3層堆積状況 (南西→)



9. 調査区北部谷 3層層検出状況 1 (南西→)



10. 調査区北部谷 3層層検出状況 2 (南東→)



11. 調査区内D-D' 西部東5層以下土層断面 (南西→)



12. 調査区内F-F' 北部東5層以下土層断面 (東→)



13. 調査区遠景 (南西→)



14. 1～3号竖穴状遺構、14号土坑完掘状況（西→）



15. 調査区遺構検出状況（西→）



16. 2号竖穴状遺構検出状況（西→）



17. 2号竖穴状遺構検出状況（南→）



18. 1号竖穴状遺構完掘状況（南→）



19. 3号竖穴状遺構調査状況（南東→）



20. 3号竖穴状遺構検出状況（南東→）



21. 3号竖穴状遺構土層断面（南西→）



22. 3号竖穴状遺構完掘状況（南東→）



23. 調査区北部調査状況（西→）



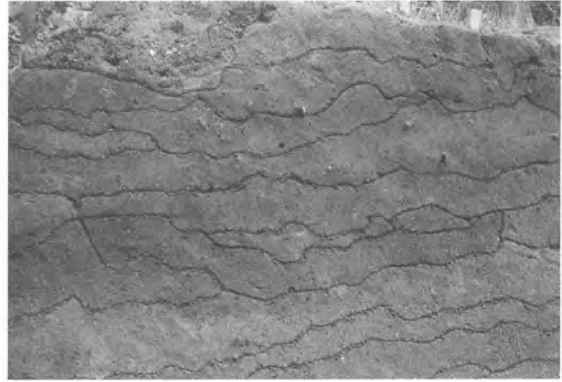
24. 14号土坑完掘状況 1 (南→)



25. 14号土坑完掘状況 2 (北西→)



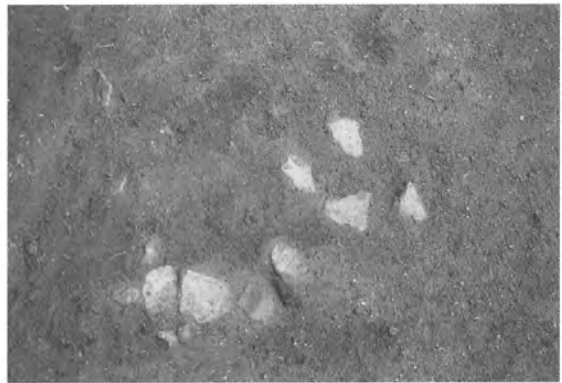
26. 14号土坑土層断面 (南→)



27. 調査区内A-A'中14号土坑土層断面 (西→)



28. 谷1c層土器出土状況 (西→)



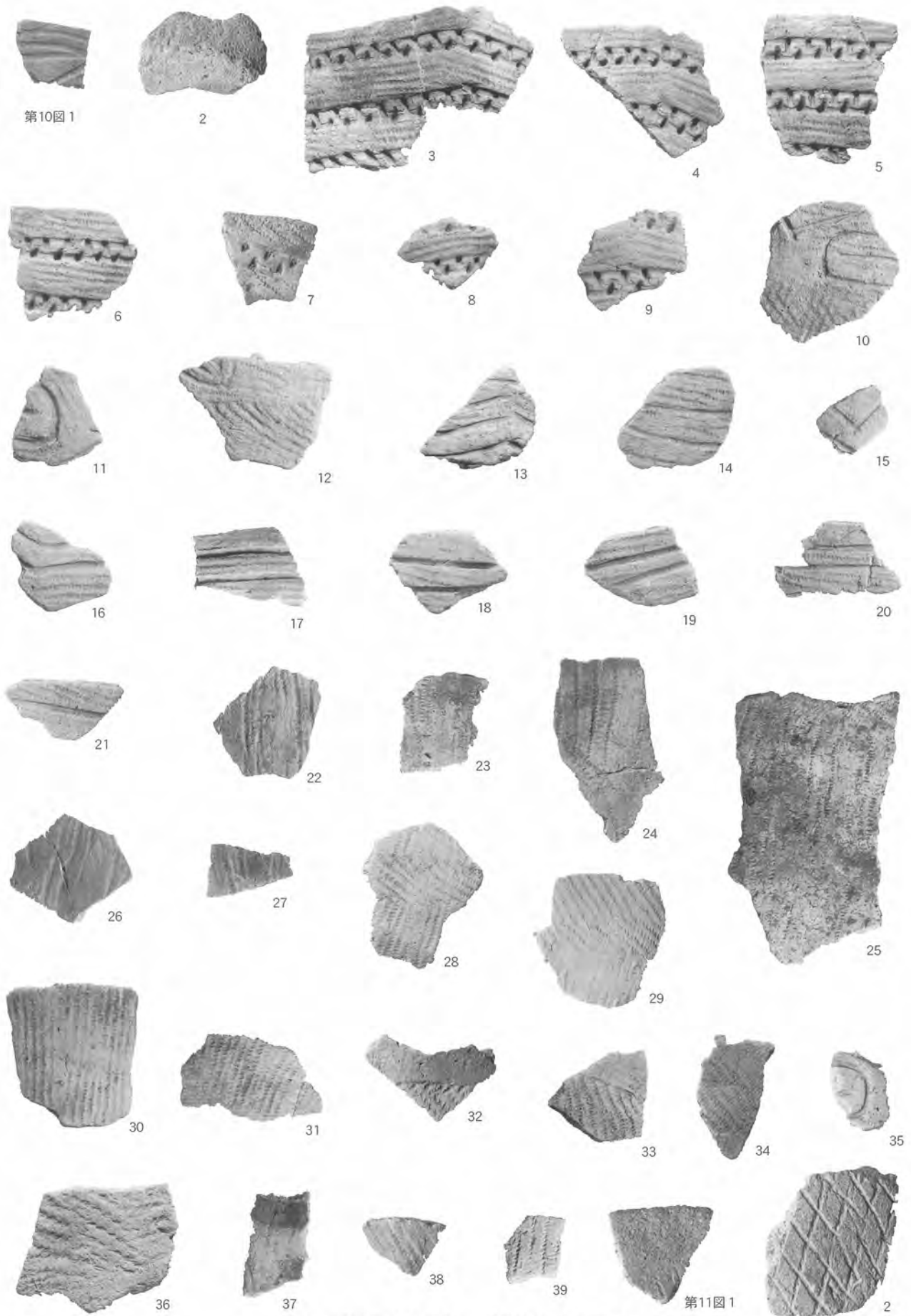
29. 谷2層縄文土器出土状況 (南→)



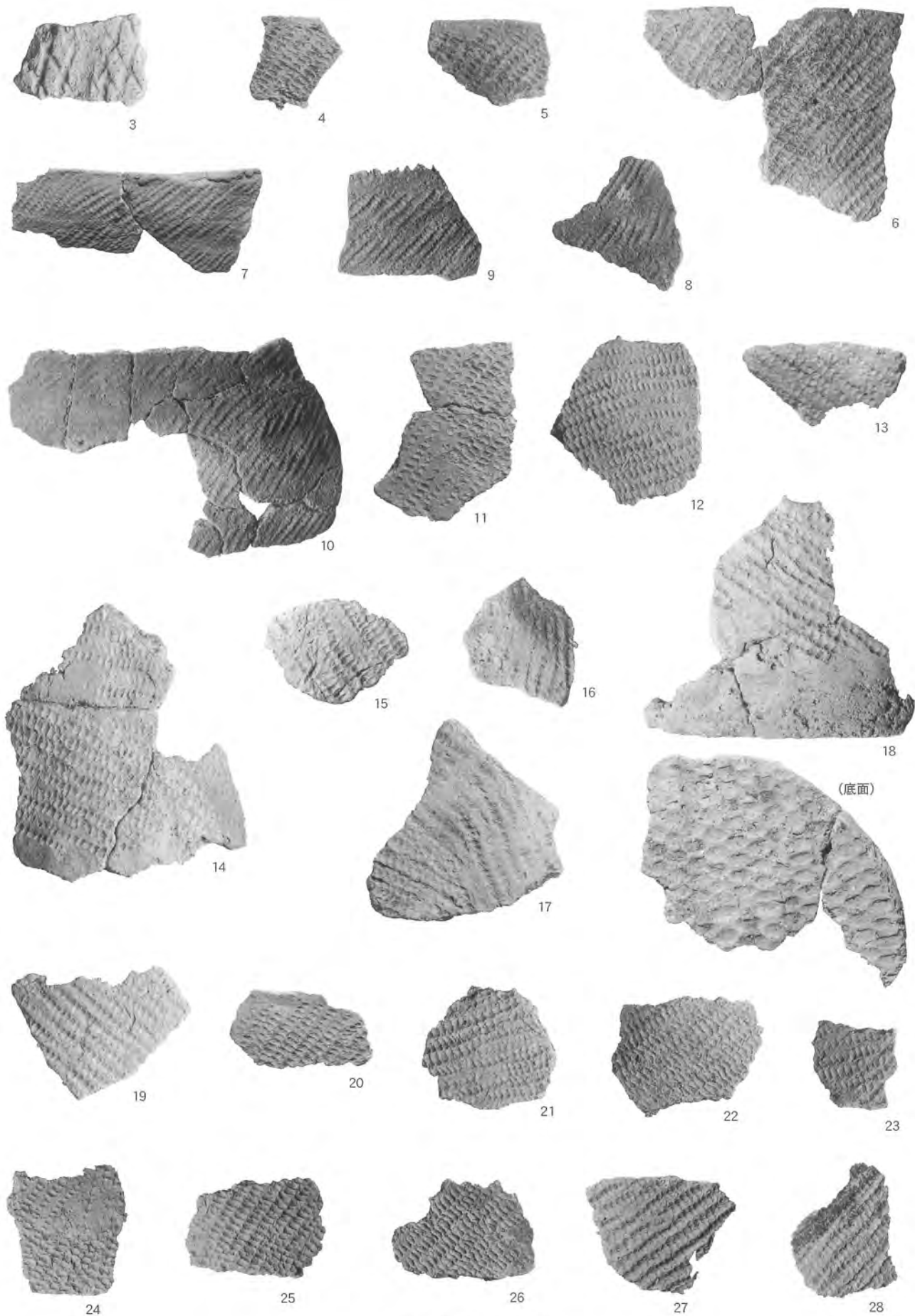
30. 調査区北東部東8層中振火山灰検出状況 (南→)



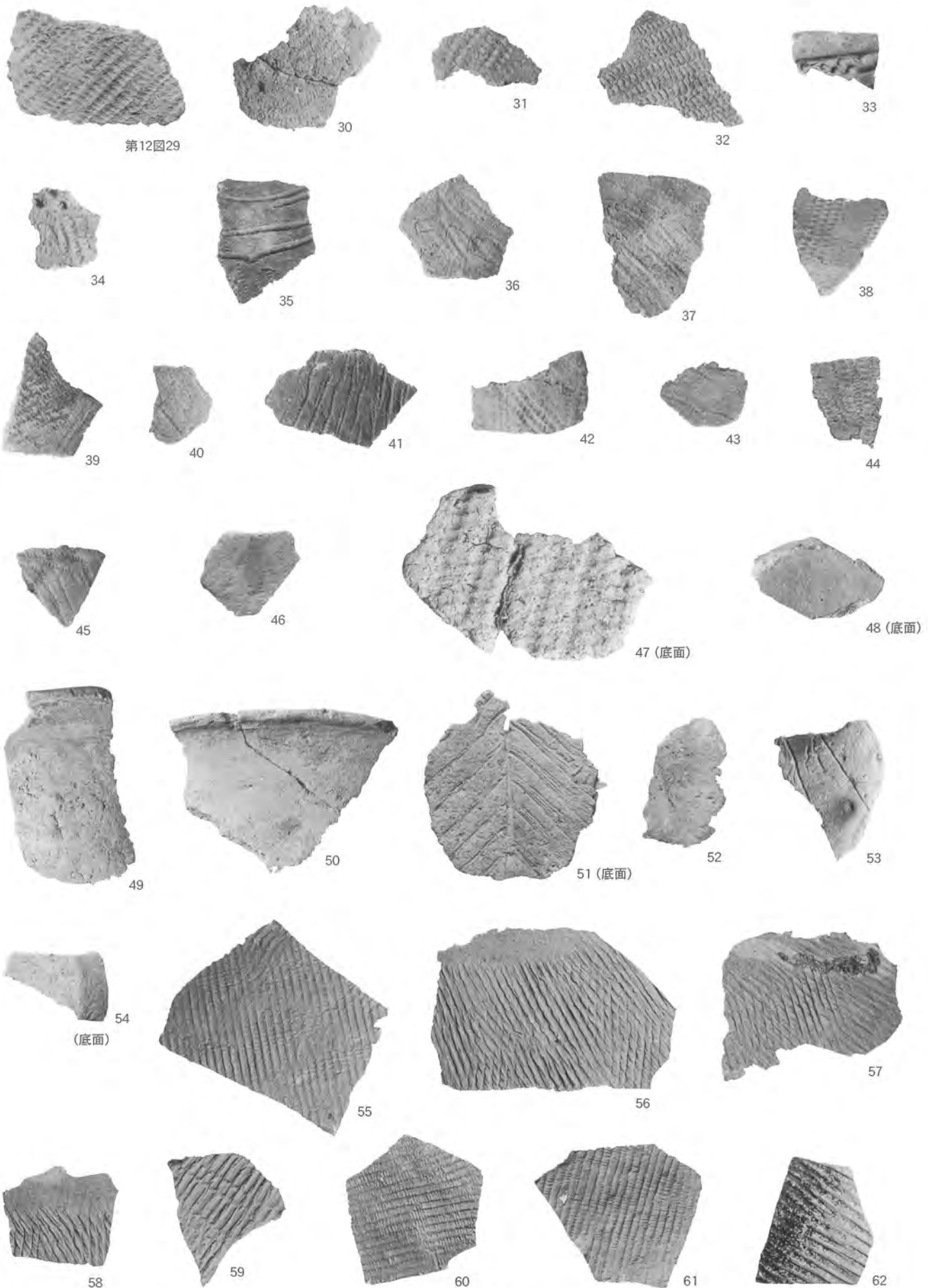
31. 作業状況 (西→)



32. 遺構内出土遺物、遺構外出土遺物 1



33. 遺構外出土遺物 2



第12圖29

34. 遺構外出土遺物 3



第13図63



(底面)



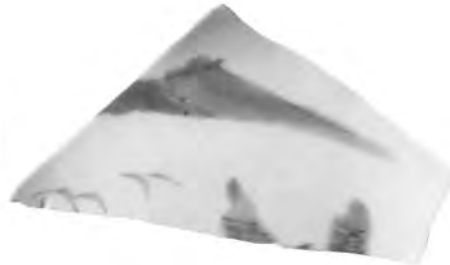
64



67



65



66



68



69



70



71

35. 遺構外出土遺物 4



第10圖40



第14圖72



73



74



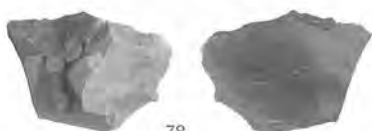
75



76



77



78



79



80



81

36. 2号竖穴状遺構出土石器、遺構外出土遺物5

報告書抄録

ふりがな	はらいかわたてあとだい2じちょうさ							
書名	弘川館跡第2次調査							
副書名	宗教学人瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	73							
編著者名	江口 邦泰							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒028-2101 岩手県宮古市茂市2-112-1 TEL. 0193-72-2111 FAX. 0193-72-2176							
発行年月日	2007年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' " (世界測地系)	東経 ° ' " (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はらいかわたてあと 弘川館跡 だい2じちょうさ 第2次調査	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 おおあづからいしだい 大字津軽石第14地 わりあざはらいかわ 割字弘川8-3	03202	LG53-2264	39°34'07"	141°55'36"	180705 ~180921	225㎡	住宅建築に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
弘川館跡	城館遺跡 集落跡	縄文時代・ 弥生時代・ 古代・中世・ 近世	竪穴状遺構3基 土坑1基		縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器・磁器・陶器・石器・ 銭貨		中振火山灰の 検出	

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

- 1 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』
- 2 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』
- 3 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』
- 4 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』
- 5 1984 『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』
- 6 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』
- 7 1985 『金浜館跡発掘調査報告書』
- 8 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』
- 9 1986 『宮古市遺跡分布図-昭和60年度版-』
- 10 1986 『中谷地・島田遺跡調査報告書』
- 11 1987 『崎山貝塚・トノ木IV遺跡調査報告書』
- 12 1987 『寒風・早稲橋IV遺跡調査報告書』
- 13 1987 『崎山遺跡群I-昭和61年度発掘調査概報-』
- 14 1988 『青猿I・下在家II・千徳城遺跡群(場合館)-昭和62年度発掘調査報告書-』
- 15 1988 『崎山遺跡群II-昭和62年度発掘調査概報-』
- 16 1989 『千鶴遺跡-昭和62年度発掘調査報告書-』
- 17 1989 『トノノ木I遺跡-第1~7次発掘調査報告書-』
- 18 1989 『崎山遺跡群III-昭和63年度発掘調査概報-』
- 19 1989 『高根遺跡-昭和63年度発掘調査報告書-』
- 20 1989 『狐崎II遺跡-昭和63年度発掘調査報告書-』
- 21 1989 『崎山トノノ木IV遺跡-昭和63年度調査報告書-』
- 22 1990 『狐崎遺跡-平成元年度発掘調査報告書-』
- 23 1990 『崎山遺跡群IV-平成元年度発掘調査概報-』
- 24 1990 『磯鶴館山遺跡-昭和63年度発掘調査報告書-』
- 25 1990 『銀ヶ崎館山貝塚-平成元年度発掘調査報告書-』
- 26 1991 『崎山遺跡群V-平成2年度発掘調査概報-』
- 27 1991 『青猿I・千徳城遺跡群-平成元年・2年度発掘調査報告書-』
- 28 1990 『熊野町遺跡-昭和63年度発掘調査報告書-』
- 29 1991 『弘川I遺跡-平成2年度発掘調査報告書-』
- 30 1992 『金浜I遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度)発掘調査報告書』
- 31 1992 『重茂館遺跡群-第1次調査報告書-』
- 32 1992 『黒森町I遺跡-平成2年度発掘調査報告書-』
- 33 1992 『高根遺跡-平成3年度発掘調査報告書-』
- 34 1992 『鑿沢遺跡群-平成2年度発掘調査報告書-』
- 35 1992 『大付遺跡-平成3年度発掘調査報告書-』
- 36 1992 『細越I遺跡・芋野II遺跡
-農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 37 1992 『崎山遺跡群VI-平成3年度発掘調査概報-』
- 38 1993 『萩沢II遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』
- 39 1993 『早稲橋II遺跡-第1次・第2次発掘調査報告書-』
- 40 1993 『崎山遺跡群VII-平成4年度発掘調査概報-』
- 41 1994 『崎山遺跡群VIII-平成5年度発掘調査概報-』
- 42 1995 『赤前I牛子沢遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』
- 43 1995 『磯鶴館山遺跡発掘調査報告書』
- 44 1995 『崎山貝塚-範囲確認調査報告書-』
- 45 1995 『笹沢I・加村・神組III・塚ノ神遺跡
-市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 46 1995 『花原市遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』
- 47 1995 『宮古市内遺跡発掘調査概報I 早稲橋II遺跡・崎山貝塚』
- 48 1996 『大付遺跡-平成5年・6年度発掘調査報告書-』
- 49 1997 『花原市遺跡-平成8年度発掘調査報告書-』
- 50 1997 『白石遺跡-第6次発掘調査報告書-』
- 51 1998 『赤畑・天神山・山口館
-北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書-』
- 52 1998 『藤畑遺跡-平成9年度発掘調査報告書-』
- 53 1999 『赤前III・赤前IV八枚田・赤前V柳沢・赤前VI釜屋ヶ沢・小堀内III遺跡
-水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 54 1999 『千鶴IV遺跡-水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 55 1999 『崎山貝塚-第12次・13次内容確認調査概報-』
- 56 2000 『木戸井内II・木戸井内III・上村III遺跡-特別高压送電線ラサ工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財調査報告書-』
- 57 2002 『山口館跡-北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書-』
- 58 2002 『小沢II大上遺跡-市内遺跡発掘調査報告書2-』
- 59 2003 『大又沢II遺跡-東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書-』
- 60 2003 『上根井沢I遺跡・沼里遺跡-市内遺跡発掘調査報告書3-』
- 61 2003 『山口館跡-第6次調査-市内遺跡発掘調査報告書4-』
- 62 2003 『下在家I遺跡-平成14年度発掘調査報告書-』
- 63 2004 『大程II遺跡・平浜遺跡-市道閉伊崎線改良工事発掘調査報告書-』
- 64 2005 『弘川館跡-瑞雲寺裏庭整備関係発掘調査報告書-』
- 65 2006 『高浜VI地神遺跡-高浜四丁目宅地造成工事関係発掘調査報告書-』
- 66 2006 『崎山貝塚第20次調査・早稲橋II遺跡第7次調査-市内遺跡発掘調査報告書5-』
- 67 2006 『八木沢古館・八木沢中田遺跡・八木沢駒込I遺跡-市道岸ノ前ラントノ沢線道路工事関係発掘調査報告書-』
- 68 2006 『木戸井内IV遺跡-宮古市生活課市営火葬場整備事業関係発掘調査報告書-』
- 69 2006 『菅ノ沢遺跡発掘調査-市内遺跡発掘調査報告書6-』
- 70 2007 『山口館跡-市道北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書-』
- 71 2007 『近内館跡-宮古市都市計画課近内地区土地区画整理事業関係発掘調査報告書-』
- 72 2007 『牛沢遺跡・大付遺跡第11次調査-市内遺跡発掘調査報告書7-』
- 73 2007 『弘川館跡第2次調査-宗教法人瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書-』

宮古市埋蔵文化財調査報告書73

ほらいかわたてあと

弘川館跡(第2次調査)

—宗教法人瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書—

2007. 7

平成19年7月31日発行

発行 岩手県宮古市教育委員会

〒028-2101 宮古市茂市2-112-1

TEL.0193-72-2111

印刷 株式会社 文化印刷

〒027-0037 宮古市松山5-13-6

TEL.0193-62-4578

